
ナイトキングの国

倉朝央里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトキングの国

【Nコード】

N8121W

【作者名】

倉朝央里

【あらすじ】

国民の反発心を消してほしい。

長寿の薬を探し求める二人にとある国王はそう依頼する。彼等が記憶を消すことが出来るという噂は大きく広まっており、また事実だった。しかし彼らはこれを拒否し、それにより軟禁生活が始まってしまうが――

side 宿屋の娘

宿屋の娘に好きな人が出来た。

一目惚れだった。宿屋に二人客が入り、家業の手伝いをしていた娘は運命と呼んでも過言でもない衝撃を感じたのだ。歩く度にわずかに揺れる銀にも見える白髪は日の光を浴びて更にその色を薄くしていた。男にしては大きめな瞳は未だかつて見たことがない金色にも見える薄い黄色をしていた。何よりもそして特徴的だったのはその声だった。見る相手に清潔感を与える白地のシャツを着ているせいか爽やかな印象を受ける。

「クジユ、明日は街を散策したいと思うんですけどどうですか？あ、保存食とかもいくつか買わないといけないですね」

一緒に宿屋へやってきたクジユへそう話しかけるウォルの声はまさしく澄んでいた。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほどウォルの声は澄みきっていた。きつとウォルの清らかさが声にあらわれているのだろう。

話しかけられているクジユは話は聞いているようだが口を開くことはなく。首を振るだけで返事をする。一切手が加えられていない無造作にカットされた黒髪が首を振る度に揺れる。誰かを睨みつけるように常に細められている漆黒の瞳はウォルに向いている。ウォルと対照的にすることが目的なのか、単にクジユ個人の好みなのかウォルと同じ型の黒地のシャツを着ていた。そしてそのシャツの袖からのびる両手の爪は黒く塗られていた。ウォルが爽やかな印象を受けるのに対してクジユはどこまでも陰湿な印象ばかりを受ける。

しかし客にそんなことを言えるはずもなく娘はとびきりの笑顔を作って二人を部屋へ案内する。ウォルが澄んだ声でありがとうと言

って微笑んだ。

「お二人はどこに行かれるんですか？」

「ううん……特に目的地はないんです。探し物をしてるんです」

「探し物、ですか？」

「ええ、そうなんです。寿命をのばすことが出来るような薬を探しているんですけど、心当たりはありませんか？」

「いえ、すみません」

「いやいや、いいんです。この街ではもう聞き込みしていたんで駄目元で聞いてみただけです」

ウォルが白い歯を見せながら爽やかに笑う。なんて素敵な人だろうかと娘は内心でウォルに対する高感度をこれ以上なくらい上げながらクジュを一瞥する。ウォルの斜め後ろを歩くクジュは目の前の娘とウォルの話など興味がないとばかりに通路の壁に貼り付けられているポスターなどを眺めていた。見つめすぎて目が合ってしまったのも嫌なので視線を前方に戻す。

「こちらがお二人のお部屋になります。二人一部屋でよろしかったでしょうか？」

「ええ、お金もありませんから」

この部屋にはベッドが二つ備えつけられている。けれど二人一部屋というのは結構狭いと思うのだ。ウォルがそれでいいと言うのなら仕方ないが。

「もう少し経ったら夕食をお持ちしますね」

「ありがとうございます」

部屋の扉を開けて脇に立つ。二人が部屋に入ったのを確認してから一礼してこの場を去る。扉を閉める瞬間にクジュと目が合った。細い目を更に細めて娘を睨むクジュはすぐに興味をなくしたのか目

を逸らす。娘は扉を閉め切ってから夕食の準備をしている両親の手伝いをするため台所へ向かうことにした。

「……あの人は怖い」

刺すような視線とか、全部を塗り潰してなかったことのようにしてしまうのではないかと錯覚してしまう漆黒とか。クジューはウォルの傍にすることでウォルの清廉さを打ち消してしまっているような気がする。それではウォルが可哀相だ。

話を聞いたところによると二人は明日には宿屋を出て行ってしまうらしい。街もその時にもう出てしまうようでつまり明日になればもうウォルに会えなくなってしまうということだ。

「ねえ、お母さん。私夕食持つて行っている？」

「いいけど、そんなこと言い出すなんて珍しいわね」

「うん、まあね。たまにはちゃんと手伝おうかと思って」

台所で少しばかり夕食を作るのを手伝ってから自室へ戻る。誰も入ってこないように鍵を閉めて机の引き出しからレターセットを取り出した。それから小さめの引き出しを探ってペンを一つ引っ張り出した。あまり使わないので何度か振っていらぬ紙に試し書きをしてみてもペんがきちんと使えるか確認する。それから娘はどう書き出そうかと頭を悩ませた。

娘はこれでウォルに自分の気持ちを伝えるつもりだった。出会って一日も経っていないのだからウォルの何を知っているわけでもない。だが今気持ちを伝えなければもう会うことすら出来ないかもしれないのだ。そんなことに耐えられるはずがなかった。あわよくばウォルにいい返事をしてもらって、ウォルがこの街に残るなんて言うてくれればもの望みはないのだが流石にそれが実現出来るなどとは本気で思っわけもない。ただ玉砕覚悟で気持ちだけでも伝えてお

きたい。それが本心だった。

「私は、貴方が、好き……です。もしよければ付き合ってください……い、っと」

声で内容を辿りながら手紙をまとめ上げていく。二枚ほどでまとめることが出来た内容を何度か見返して折りたたむと封筒へ入れる。丁寧に封をしてからそれをポケットに皺が出来てしまわないように注意しながらポケットへしまふ。なるべく音をたてないように椅子からおりて鍵を開ける。別に忍ぶ必要はないのだが恋文を書いていたら親に知られるとなんとなく気まずいような気がした。

そろそろとドアを開けて台所へ急ぐ。時間的にはもうそろそろ夕食の準備が出来ている頃だろう。台所から漂ってくる良い匂いで夕食が出来ていることを確信する。その夕食を親がお客さんへ運んでしまふよりも早く台所へ辿り着かなくてはいけない。廊下は走らないように、と母にいつも注意されていたが今回はそれを破ってほとんど走るようにして台所へ向かう。台所へ辿り着けば両親はちょうど夕食を運び出そうとしているところだった。

「あ、待つて！ さっき来たお客さんの夕食私が運ぶ！」

何事かと首を傾げる親から二人分の夕食を奪うように受け取ってからそれらを落としてしまわないように注意して歩き出す。

「私もたまには手伝いたいの」

不審がる両親にそう告げてから夕食が冷めてしまわないうちに、と少しだけ足を速めた。浮つく心をなんとか落ち着かせてウォールのいる部屋の前に立つ。大きく深呼吸をして自分に落ち着くように言い聞かせる。いつまでも部屋の前に立っていたのでは不審者になってしまうから大きく息を吸い込んだ後覚悟を決めてドアをノックする。手に持っていた夕食がぐらついて焦ったがなんとかバランスを

取り戻すことが出来た。そちらに気を取られたせいで緊張が随分と消え失せてしまい、ドアが開いた途端身体が緊張で強張った。

「あ、さっき案内してくれた……」

「夕食をお持ちしました」

緊張をウォルに悟られないように平静を装う。わずかに震える手に気付かないふりをして二人分の夕食を乗せた盆をウォルへ手渡した。

「ありがとうございます。おいしそうですね」

「両親が作ってるんです。私は少し手伝いをしただけなんですけど」
「手伝いでもすごいですよ」

世辞なのか本心なのかは定かではないが屈託ない笑みを浮かべながらそう言うウォルはもう一度娘に礼を言った。それから部屋の中に引っ込もうとするので娘はそれを引きとめる。

「あの、受け取ってもらいたいものがあるんです」

「……俺にですか？」

「はい」

声が上がってしまわないように気を付けながらそう答えてポケットに突っ込んでいた手紙を引っぱり出した。少しだけ皺になっていたので両端を持って軽く引っ張ることで皺をのばしてからウォルへ渡す。ウォルは差し出された手紙を受け取れないでいる。夕食を持っているせいで両手が塞がってしまったからだ。

「あ、すみません」

「いや、大丈夫です。あー、えっと、お盆の上に置いてもらってい

「いですか」

「はい、すみません」

汚れてしまわないようにお皿とお皿の間に手紙を置く。少し体重をかけてしまったせいでウォルがぐらついたのですぐに身を引いた。

「お返事しますね」

そうウォルが返答するだけでこれ以上ないくらい心臓が跳ねる。期待に胸が躍るがいつまでもここには迷惑だろうと思ひ慌てて頭を下げる。

「ではごゆっくり」

「ありがとうございます」

ウォルはきつと笑っているのだろっけどそれを確認する余裕がないほど娘は浮かれていて、目を合わせることもなく来た道を戻って行く。出来るだけ足音を立ててしまわないように、夕食を運び終えたことを報告するために両親の元へと急いだ。浮つく足を必死に地から浮かせてしまわないようにと注意しながら娘は歩いた。

今日は気持ちよく目覚めることが出来た。鳴り響く目覚まし時計を撫でるようにして止めてから髪を何度か撫でて寝癖を直す。何度撫でても寝癖は一向に落ち着く様子がない。仕方ないので寝癖は諦めてベッドから這い出して服を着替え始める。

「うー……」

目を刺す太陽から少しでも逃げようと瞬きを繰り返すが瞼の裏が赤くなるばかりで事態は何も変わらない。寝巻を脱ぎ捨てて服に腕を通す。寝起き独特の倦怠感を纏わりつかせながらしばらくの時間をかけてなんとか着替えを済ませる。今日は家業の手伝いをする気はなかったのであまり早く起きてはいなかった。のろのろとした歩みで自室を出ればお客さんがちょうど宿屋から出て行くところだった。

白と黒がはつきりわかれた二人は娘が昨晚夕食を運んでいったウォルとクジュだった。両親がそれを見送っている。それを見ては娘も出ないわけにはいかないだろう。慌てて玄関まで出ればウォルとクジュの姿はだいぶ小さくなっていた。その姿を見つめてすぐに頭を下げる。頭を上げた時にはちょうどウォルがこちらを振り向いて手を振っていた。

あの澄んだ声はこの距離では聞くことは出来ない。それが惜しかったが仕方のないことだと思った。ほぼウォルにだけに視線を送りながら娘は小さくひとつ息を吐いた。

好きだったはずの人が行ってしまった。

藪から棒に

「摩訶不思議な術を使つと言われているクジユ様、ウォル様とお見受け致します」

突如目の前に現れた男は面で顔を隠していた。困惑を滲ませながらクジユとウォルが男を見れば男は面ごしにこちらを睨みつけた。

「だったらどうした」

クジユが重々しく口を開けば男が身体を震わせたのがわかった。それもそうだろう。クジユの声は一句だけでもそれを聞いた人の耳に纏わりつく。真夏の茹だる暑さにも劣らない不愉快さを感じさせる纏わりつき方をもつてしてクジユの声は更に人の内側へ滑り込む。粘着質なその声は聞いた者の中に潜む後ろ暗い部分をじわじわと拡張させていく。内側を暴かれているような不快感にウォルの眉間にも皺が寄る。何度聞いてもこの声には不快感を覚えてしまう。

警戒心をあらわにし、愛想をかけらも見せようとはしないクジユに気分を害した風もなく男は面のせいで表情の窺えない顔をこちらに向けて口を開いた。もつとも、面をしているせいで開いた口は見えないが。

「それならば、我等に御同行願いたい」

「我等、ですか？」

ウォルが首を傾げる。どこをどう見ても男は一人しかいない。それなのに男は我等と口にした。その矛盾に理解が出来ないでいるとクジユがウォルの肩を叩いた。

「ん？」

振り返ればクジユは無言で更に後ろを指差している。背後には十人ほどが全く同じ面をつけ、それぞれに武器をも持って並んでいた。

「これは……大変ですね……」

「もう一度だけ。御同行願います」

前方の一人が先程と全く同じ声音でそう繰り返す。クジユとウォルは顔を見合わせると両手を耳のあたりまで挙げた。

「俺達は人並み以上の戦力があるわけじゃないですからこの数を相手にするのは無理ですね」

「一対二でも怪しいがな」

「ああ、それは言えてますね」

そう言う通りクジユとウォルの手持ちには武器のようなものはない。武器を突き付けられてわずかに身体が震えているがクジユもウォルもそれには気付かないふりをして前方の男を見据えた。

「大丈夫です。抵抗しない限り危害は加えません」

そう男が言うと同時に二人の首筋に槍が、銃が、刀が付きつけられる。そのひやりとした感覚に内心恐怖しながらもそれを表に出すことなく虚勢を張って二人は示し合わせたように溜息を吐いた。

「申し訳ありません。これも王の御意志ですので」

本当に申し訳なさそうに前方の男は一度頭を下げると懷から縄を取り出して二人へと近付いた。

不躰に最強

面をつけた男に連れてこられたのは質素とは言い難い豪華な一室だった。延々とした庭を抜き去って絢爛豪華な官邸に通された二人はそれぞれが別の部屋へと通された。部屋といっても牢獄のような場所ではない。部屋の棚にはところ狭しと高そうな壺や置物が陳列されている。部屋の中央に置かれているベッドはこれまた高級そうな生地で出来ていて触ると滑るように流れた。ここに来るまでは縄で拘束されていたのだが今は外されていて、手足を拘束されていないわけではない。無理矢理連れて来られたにしては扱いが良いような気がする。ウォルと引き離されたのがどうにも気に入らないがこうして自由なだけマシだと思えばいいだろう。

これからどうするべきか。逃げるといふ選択肢もくはないがクジユもウォルも武術に長けるわけではないのだ。ましてやここを誰にも気付かれず、もしくはうまく立ち回って脱出出来るほどの策士なわけでもない。それがわかっているのでその上で行動を起こすのは危険だろう。今は抵抗しない限りは手出しをしないという面の男の言葉を信じるしかないように思えた。

「鍛えてれば良かったか……」

元々ウォルはわからないがクジユは戦闘には向いていないのだ。思いもしないことをそうばやいてみて退屈を紛らわす。ベッドに腰掛けて足を投げ出したところでドアがノックされた。こちらの返答があるよりも早くドアは押し開けられる。

「突然連れて来ちまって悪いな」

生まれつきなのかくすみのない光を跳ね返すような金色の短髪。

それは毎日丁寧な手入れがされているのか男が身体を揺らす度身体
の線に沿って滑らかに流れた。笑顔こそ浮かべているがその眼光は
鋭く敵意すら感じる。男が身につけている衣服にはきめ細やかな刺
繍や金での装飾が施されており、一般人でないことは一目瞭然だっ
た。

「……」

男にどう答えたものかとクジユは苦悩した。返答しようにもクジ
ユの声は少しばかり特殊なのだ。クジユの声を聞けばほとんどの人
間は眉間に皺を寄せる。つまり不快にさせてしまう。そういった性
質なのだ、仕方がない。だからこれまではやり取りのほとんどはウ
オルに任せていたのだがウオルがいないのであればクジユが返答す
るしかないだろう。しかしそう気軽に声を聞かせてしまっているも
のだろうか。そうやってぐるぐると考えていると男はクジユの返答
がないことにも構わず続けた。

「俺はチェック。この国の王をやらせてもらってる」

王と言うわりにはチェックの仕草や言動からは王らしい気品は感
じられない。その言動は粗削りで動作のひとつを取っても繊細さは
見られなかった。そのあたりはチェックの人柄なのかもしれないが
総合的にクジユの目から見てチェックのことを王だとは思えないで
いた。

「お、その顔だと信じてねえな？ その辺は自由だけだな、俺の頼
みは聞いてもらいてえ」

なんと不躰な物言いだろうか。拉致紛いなことをされている身な
ので口応えをする気はないが眉間に皺が寄るのは致し方ないことだ

ろ。チェックはクジユの反応などどうでもいいのか更に続けた。

「俺はな、王の座に着いてから日が浅いんだ。そのせいもあって反発が絶えなくてな。お前さんの使うおかしな術な人の記憶を消せるんだろ？」

「……反発してる人間のその記憶を消せとでも？」

クジユが言葉を発した途端にチェックの身体が強張る。その瞳は見開かれ恐怖が宿ったがその反応には慣れきっていたので意にも止めない。チェックは流石は王と言うべきか恐怖をすぐさま押さえ付けてから何事もなかったかのように続けた。その額には汗が伝う。

「そうなるな」

「無理だな。やるやらない以前に規模がでかすぎる。他をあたれ」

この場で嘘をついてもいずれ出来ないことはバレてしまう。小規模ならば多少の記憶を改変することは出来るが反発する者は一人や二人ではないのだろう。そうでなければおかしな術と持つという噂のみで王が動くはずもない。藁にも縋りたい状況に置かれているのかもしれない。

クジユの返答をどう受け止めたのかチェックは芝居がかった動作で首を振るとドアに手をかけた。

「その返答は交渉決裂ってことか。でもな、俺には手段を選んでも暇はねえんだ。そっちがそうくるなら軟禁生活にようこそ、ってことになるわな。良い返事をくれるまでここから出すわけにはいかねえ」

半分ほど開いたドアの間をすり抜けたチェックはドアを閉めながらその隙間に手を差し込んで小さく何度か振った。

束の間に再会

ウォルはクジュと引き離されてひたすらに憂鬱になっていた。クジュと同じように豪華な部屋に通されたがそれを眺める余裕もないほどウォルは落ち着きを欠いていた。忙しく部屋を歩き回りぶつぶつと小言を繰り返す。

「クジュ大丈夫かな。口下手だから誰かを怒らせたりしてないといんだけど……とにかく早く合流しないと」

冷静さを取り戻せないままクジュと合流することばかりを考える。拉致されている手前、あまり目立った行動をするのは得策ではないがクジュを一人にしているは何が起るかわからない。ただのいざこざで終わればいいのだがクジュの場合そうもいかないかもしれない。その懸念がウォルに焦りばかりを募らせた。

「ああああ、もう！ どうしよう！」

動くべきか動かざるべきかしばし考え込んだ末に出口に足向けた。その瞬間にドアがノックされてその足が竦む。

「あ、はい。どうぞ」

逃げ出そうとしていたことを悟られないように後退してベッドに腰を下ろしてから声を上げる。それを待っていたドアの向こうの相手は極力音をたてないよう注意を払いながらドアをゆっくりと開いた。

「失礼します」

深い一礼をしてから入室してきたのは面をつけた男ではなく、給仕をする者を思わせる衣服を身に付けた女性だった。この官邸の主ではないらしくその手は炊事で酷使しているのか荒れて赤くなっており、顔に化粧は一切施されてはいなかった。ここで働く者だろうか。女性はドアを丁寧に閉めるともう一度礼をした。

「私はこの官邸で給仕などをさせていただいております、シーナと申します。この度は王がこのような手荒な真似をしまい申し訳ありません」

「いや、あまりお気になさらないでください。ほら、長い距離移動する賃金が節約出来ましたし」

「……どこか目指されているのですか？」

「まあ、明確な目的地があるわけではないのですが」

シーナがあまりにも申し訳なさそうに謝罪するのでウォルは思わずそう言い訳する。嘘を言っているわけではない。目的地はないがクジュやウォルは出来るだけ多くの場所を旅して回る必要があった。そのために拉致という形であつてもこうして誰かと交流をとることが出来るのは悪いことではない。それにそうポジティブに考えなければこんな状況で平然としていることは出来なかった。

シーナの外見はある意味クジュと酷似していた。鴉の羽の色を織り込んだような黒髪は仕事をする上で邪魔なのか低いところでひとつに束ねられて尻尾のように彼女が動く度に揺れている。瞳も同じように深い黒をしており、見つめ続けられ吸い込まれてしまうようだった。

「俺と同じようにもう一人ここに連れてこられたはずなんですけどどこにいるんですか？」

「クジュ様のことですか？　でしたら王が協力を願っている頃かと」

「協力？」

クジユとウォルにはそれぞれ少しかり特殊な能力が備わっている。自慢して回るほどのものではないが、二人はその能力を活かして生活を成り立たせていた。そのため噂が流れているのも決して悪いことではないし、出来るだけ依頼は受けたいと思っている。多くの場合、求められるのはクジユの能力で、依頼を受けるか否かを判断するのは専らクジユの役目だ。今回も依頼だと言うのならウォルが口を挟む余地はないのだろう。それに依頼だと言うのなら易々と殺害されてしまうということもない。そこまで聞いてウォルはひとまず安堵した。

「クジユ様は記憶を消すことが出来るのだと噂でお聞きしました」

「まあ、そんなところですね」

厳密には消すのではないのだがそれを今シーナに言ったところでどうなるわけでもないので黙っておくことにする。

「王はクジユ様に消していただきたい記憶があるのです。この国で拡大しつつある王への反発心を」

「はあ、それは……」

恐らくはクジユでは無理だろう。それはわかったがそれを最終的に判断するのは実行主であるクジユだけだ。ウォルが口を挟めるはずもない。ウォルが表情を曇らせたのが困ったように見えたのかシーナは申し訳なさそうにもう一度頭を下げた。

「ウォル様、心苦しいのですが私個人からも依頼があります。消していただきたい記憶があるのです」

「それは貴女の？」

「ええ、消していただきたい私の記憶は、」

彼女が集く言葉を紡ごうとした瞬間、乱暴にドアが開かれる。力の限り開かれたドアは蝶番が悲鳴を上げる。壁に叩きつけられても勢いは衰えず、跳ね返るドアを受け止めたのはチェックだった。その背後にはクジユも顔に憂鬱を貼りつけて佇んでいた。

「お。取り込み中だったか」

「クジユ！」

チェックの言葉が終わるとほぼ同時にウォルが声を上げる。立ち上がってチェックを押しつけるようにしてクジユの目の前まで来た。チェックはウォルの邪魔になってしまわないように道を開け、シーナはそのチェックに一礼をして少し後ろへ下がる。

「クジユ、心配してたんですよ。クジユが変なことやって誰か怒らせてやしないかって」

「……」

心外とばかりにクジユが表情を歪めたがウォルはそれを黙殺する。チェックは二人の様子を眺めて溜息を吐いた。

「コイツがなあ、ウォルに会わせる会わせろってうるさいからよ、仕方なく」

「王、クジユ様への依頼は」

「断られた。無理だとさ。まあ俺に諦める気はねえがな」
「そうですか」

それだけ告げるとチェックは踵を返してもと来た道を戻り始める。彼が歩く度に衣服に取りつけられている金の装飾がかちゃかちゃと

擦れる音をたてる。廊下まで出たシーナは深々と礼をしてそれを見送った。

「面倒な人に捕まりましたね」
「そうだな」

憂鬱が凝縮されたクジュの嘆息混じりの声に頭を下げたままのシーナが身体を震わせたのがわかった。

気軽に王様失格

ウォルはクジユと離れることを拒んだ。それを受け入れたチエツクはクジユにあてた部屋にもうひとつベッドを運びこませ、二人で一部屋を使用することを許可した。脱走を試みれば命はないと念を押して、の話だが。それでも二人にとっては有り難いことだったのでその日は脱走など考えることなく寝心地のいいベッドで睡眠をとった。これまであまりきちんとした場所で睡眠をとってこなかったせいかクジユ、ウォル共にその日は深い眠りに落ちてしまっていたようで、目覚めたのは昼が近くなっていた頃だった。

「……クジユ、おはようございます」

「おう」

黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声。それをすぐさま聞いた者の中に潜む後ろ暗い部分をじわじわと拡張させていく錯覚に陥らせるクジユの声が相殺する。クジユの声をウォルが浄化し、ウォルの声をクジユが侵食することで二人の特殊な声はなんとか平均的なところまで持つて行くことが出来ていた。

「なんかこんな時間に起きるなんて重役出勤みたいですよね」

「ある意味重役だな」

「言われてみれば、そうですね」

目を擦りながら苦笑するウォルに冷たく返してからクジユは布団を押しつけてベッドから出る。眠気が抜けきらないせいで足取りはおぼつかないがドアまで辿り着くと体重をかけるようにして押し開

けた。

「クジユ、どこ行くんですか？」

「着替えがない」

「あ、本当ですね」

ウォルは言われて初めて気付いたのだがこの部屋には着替えらしき物が置かれていなかった。忘れていたのだろうか。ウォルは構わないのだがクジユは寝起きの姿のままでいるのには耐えられないらしい。誰か人を捜して着替えを用意してもらうつもりなのだろう。それならば一緒に行こうとウォルが布団から出たところでクジユの動きが止まった。ドアを開けるべく体重をかけた体勢のままクジユは耳を澄ましているようだった。何事かとクジユに倣い耳を澄ます。聞こえてきたのは陶器が割れる音だった。それもひとつや二つではない。

「ちよつ、クジユ!？」

割れる音が鳴り止むと同時にクジユはドアを完全に押し開けて部屋を出た。あの音は相当に近くから聞こえていたので動かない方が得策だとは思うのだがそれを伝えるよりも早くクジユは出て行ってしまったので慌ててそれを追う。

何やら騒動が起きていたのは隣の部屋だった。誰かが怒鳴っているのがわかったが壁で隔たれているせいで内容までは聞き取れない。内容を聞き取ろうとクジユが忍び足で部屋へ近付く。あともう五歩ほどで騒動の発信源である部屋のドアに触れようかと言うところでそのドアが乱暴に開け放された。

「王！ 俺は納得出来ませんから！」

チェックでもシーナでもない。初めて見る男は腰に刀を差しており、全てを吸い込んでしまいそうなほど深い黒をした瞳は部屋の奥を睨みつけていた。

男は二人に気付くと怒りに燃えた瞳を隠すかのように瞼を下ろした。次に瞼を上げ、目を開いた時には瞳からは憎悪は拭い去られており、男は一礼すると踵を返してどこかへ行ってしまった。

「なんだったんでしょうね……」

「見苦しいところを見せちまったな」

ドアに手を沿えて廊下を覗くようにしていたウォルがそう呟けばクジユが返答するよりも早く溜息混じりの返答が部屋の中から飛んできた。チェックの声だ。部屋から出てきたチェックは起床して随分時間が経つのか髪は綺麗に纏められていて、昨日よりも豪華さを感じさせる衣装に身を包んでいた。

「あれは弟だ」

「王様の、ですか？」

「そんな堅苦しく呼ぶな。チェックでいい。……いや、俺じゃなくてほら、いただろ、女が」

「シーナさんの？」

「そう。シーナの弟。俺とシーナが付き合ってるのが気に入らないんだそうだ。一応身内だから適当にあしらうのも気が引けてな」

説得を試みているのだが議論は平行線で互いに歩み寄れる気がしないのだとチェックは自嘲を織り交ぜながら説明した。眠いのか説明し終わってからチャックは大きく欠伸をひとつ零し、両腕を振り上げて背伸びをする。

「んん……。で、お前らはなんでここにいるんだ？ 隣の部屋がう

るさくて目が覚めたか？」

「いえ、そんなことは」

「着替えがない」

端的に用件だけをクジュが伝える。不満を含ませていたわけではなく、ただ事実だけを口にしたといった様子のクジュだったがチエツクは申し訳なさそうに眉を八の字に下げた。クジュの声に怯えたのか瞳が一瞬揺れたがすぐに何事もなかったかのように揺れはおさまる。

「ああ、悪い。配慮が足りなかった。今すぐシーナに用意させる」

ドアを開け放したまま部屋に戻って行ったチエツクは部屋に取り付けられている電話に手をかけた。二人が眠った部屋にはなかったのだがこの部屋には電話があるようだ。金色をした龍が電話本体に巻きついており、子機へは金色をした蛇が巻きついていて。本体と子機を繋ぐくると何度も円を描いているコードはやはり金の細かな装飾が施されていた。チエツクは子機を持ち上げると本体のボタンをいくつか押して、子機を耳に押し当てた。

「シーナか？ ああ、俺だ。クジュとウォルの着替えがないそうだから用意しておいてくれ」

電話の向こうのシーナが何か返答をしているのかチエツクが何度か頷く。それから「頼んだ」とだけ残してチエツクは子機を元の場所へと置いた。がちゅん、というなんとも間抜けな音がしたがチエツクは慣れているのか何の反応も見せない。クジュの背後ではウォルが笑いを噛み殺していた。

「俺は今日出掛けるからここにはいねえんだ。世話はちゃんと任せ

であるから俺のいない間に依頼のこと考えておいてくれよ」

「無理だと言ったはずだが」

「……だから考えておいてくれって」

クジユの声に慣れないのかチエックは一瞬口を噤んで冷や汗を浮かべたがすぐに繕って引き攣った笑みを浮かべた。繕うのに時間が足りなくて引き攣れてしまったのだろう。

「どこに行くんですか？」

「これでも一応王様だからなあ……。家に籠ってばかりもいらねえんだよ」

ウォルの質問に曖昧に答えてからチエックは二人の間をすり抜けて廊下を歩き出した。足取りは重く、外出することが憂鬱なようだった。それを見送るクジユの瞳は多分に呆れが含まれている。

「あいつは本当に王なのか？」

「そうみたいですよ」

あの姿を見せられてウォルもだんだんと自信がなくなってきたのだがシーナの話聞く限りそれは真実なようだ。ひどく曖昧な答え方になってしまったがそれを受けたクジユは眉間に皺を寄せた。

「呆れた。国が潰れるのも時間の問題じゃないのか」

「さあ、どうなのでしょう？」

だからこうしてクジユが連れてこられたのだろう、という言葉は言われずともわかっていると思うので飲み込むことにした。

老人庭師はかく語る

チェックが出掛ける間際に言っただように少しするとシーナが二人分の着替えを持ってやって来た。それに着替えてからシーナが用意したのだという豪華な朝食を有り難くいただいて、その後シーナの案内で庭へと連れて来られた。

「すみません。本当こちらが足を運ばなければいけないのですが、我儘な子で」

二人を退屈させないためなのか時折通りかかった部屋の説明をしながらようやく庭へ出たところでシーナはそう謝罪した。どうやら誰かに会わせるつもりらしい。クジユからすれば部屋に一日中閉じ込められているよりは気分転換が出来ていいのであまり気にしないしてほしいと思う。それを伝えるためにはどうしても彼女を怯えさせることになってしまうので伝えることは諦めているとウォルが口を開いた。

「気にしないでください。部屋にずっといるよりは気分転換出来るいいですから」

「……すみません、本来ならお客様として招かなければいけないのに軟禁のようなことをしてしまって……」

「あ！ いや！ 俺はそういうつもりで言ったんじゃないんですね！」

ウォルのフォローは良くない方向へ解釈されてしまったらしい。

一気に沈み込んだシーナにどう声を

掛けようかと考えあぐねているウォルは助けを求めるようにクジユを見たがクジユにはどうすることも出来ないので無視する。

「あ、ひどい」

非難するように飛ばされた声も無視する。

こうして話しながらもシーナは庭を突き進んでいく。その後を追っていくとだんだんと木々が少なく、視界の開けたところへ出始めた。三人が芝を踏む音に混じって時折何か風を切る音が耳に届く。その正体が気にはあるが落ち込んでいるシーナに問うのも気が引けるので黙っておいた。歩けば歩くほどその音は大きくなり、更にそれに加えて気合いを込めた声まで聞こえてきた。それらから予想するに誰かが何かを振っているのだろう。

「あ」

不意にウォルが声を上げた。木々はもう既にほとんど見当たらなくなっており、視界はかなり広がっていた。その視界に飛び込んできたのは、ウォルだけではなくクジュも思わず反応を示してしまうものだった。ウォルと違って声は出なかったが代わりに目が軽く見開かれる。二人の反応を見たシーナは不思議そうに首を傾げた。

「あれ？　もしかしてもう顔を合わせてたりしますか？」

「……ええ、ちよつと見かけただけですけど」

視界に入ってきたのはチェックが言い争いをしていた男だった。木刀を握った男は掛け声と共にそれを振り上げ、振り下ろす。それをどれくらい繰り返していたのか深い黒髪は汗を吸い込んで更に黒く染まり、首筋にべったりと貼りついていて。男は前方を射殺するように睨みつけながら一心不乱に木刀を振り続ける。余程集中しているのか三人が近付いていることにも気付いてはいないようだった。

「ナイトラ、お客さんに挨拶しなさい」

シーナが男の名前を呼んだ。そこでナイトラと呼ばれた男はようやく三人に気付いたらしく振り上げた木刀を振り下ろそうとしたところではたとえと動きを止めた。急に動きを止めたせいで髪に纏わりついた汗が飛び散ったがナイトラは気にも止めていないようだった。木刀を緩慢な動作で下ろしてから、流石に額から流れてくる汗は邪魔なのか服の袖で乱暴に拭う。それから億劫そうに三人の方へと首を回した。

「……クジュ様とウォル様ですか。本来は俺がそちらに出向くべきでしたね、申し訳ありません」

最後の一言は棒読みで謝罪の気持ちが込められているように思えなかった。それに文句をつけてやろうかとクジュが口を開きかけたところでそれを先読みしたウォルがそれを制す。そして喋る役割を引き継いだ。

「いえ、大丈夫ですよ。ナイトラさんはシーナさんの弟さんなんですよよね？」

「はあ、まあ。それをどこで？」

「チエックさんから聞いたんです」

「ああ……」

チエックの名が出てきた途端ナイトラが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。仮にも王だろうにそこまでチエックが嫌いなのだろうか。そのあからさまな態度を諭すようにシーナがナイトラの名を呼ぶ。それを受けてナイトラは今にも舌打ちでも零しそうな表情でわざとらしく話題を逸らした。かすかに乱れる息を整えながら首だけでなく身体も三人の方へ向けてナイトラは口を開く。

「俺はナイトラと言います。御存じの通りシーナの弟で王の護衛役として騎士をしています」

後半でチェックの名を出した途端これ以上なく嫌そうにナイトラの表情が歪む。乱れた息は既に整えられていて、纏わりつく汗が外気によって冷えてしまい冷たいのか首を振って汗を散らした。なんだか犬のような動作だと思う。

「毎日の日課の鍛錬で足を運ぶことが出来ませんでした、申し訳ありません」

相変わらずの気持ちの込められていない謝罪にウォルがもう一度同じような言葉を返そうとしたところでナイトラの眉間に皺が寄った。思えば先程からナイトラの不機嫌そうな表情しか見ていない気がする。今度は一体何だろうかとナイトラを眺めているとナイトラは二人に向かって一礼すると木刀をその場に投げ置いて舌打ち混じりに駆けて行った。

「……へ？」

「すみません。多分、王から電話があつたんだと思います」

「電話？ この距離で聞こえるのか？」

「そつみたいですよ」

クジユの声に一瞬怯んだ様子を見せたがジーナは何事もなかったかのようにそう返す。そのあたりは彼女にもよく理解出来ていないのか苦笑混じりだ。

「ちょっとナイトラだけに任せると心配なので私も見てきますね、すみません」

「お気になさらず。俺達はこのあたりでぶらぶらしてるんで。ね、クジユ？」

「……」

クジユが無言で頷いたところでシーナはもう一度すみませんと申し訳なさそうに謝罪すると駆け足でナイトラが駆けて行った方向へ向かう。それをしばらく見送っていたがシーナの姿が見えなくなつたあたりでウォルが大きく息を吐いた。

「やっと息を抜けるって感じですね。……クジユ、逃げますか？」

「いや……」

ウォルの問いにクジユは顎に手を沿えて考える素振りを見せる。すぐに結論は出たのかクジユは顎から手を離すと首を横に振つた。乱雑に切られた黒髪が少し遅れてその動きに沿って流れる。

「無理だろうな。ナイトラは相当に腕が立つように思うし、この庭も相当に広い。迷わずに逃げ出せばいいが万が一迷った場合は絶望的だ。逃げるならもっと確実な時の方がいい」

「それはそうなんでしょうけど……」

クジユが言うことは尤もだ。正論だと思う。しかしクジユはチェツクの依頼を拒み続けているのだからその機会を待っているうちに殺されてしまうという可能性も皆無ではない。今のところ相手にそういった様子はないが依頼内容からしてもチェツクは相当に追い詰められているようだからそう長くは待つてはくれないだろう。いつ強行手段に出てくるかはわからない。ウォルの危惧はわかっているのだろうがそれでもクジユは今回脱出する気はないようだった。

「まあ、クジユがそう言うなら俺も従いますけど。じゃあどうしま

す？ 庭でもぶらぶらしますか？」
「そうだな」

逃げ出さない以上特にすることもないのでシーナに言った通り庭を意味なくうろつくことにする。庭は先が見えないほど広く、チエツクが王というのも本当なのだろうなと思えてくる。そんな少しずれた納得の仕方をしていると少し先の木々が生い茂っているあたりに人影が見えた。

「あ、人ですかね」

余程退屈だったのかウォルがそちらへ駆け寄っていくのをクジユが歩いて追いかける。人影は二人に気付いたのか木々の隙間を縫って姿を現した。

「……庭師さんですか？」

姿の現したのは老人だった。既に六十は超えているであろう老人は麦わら帽子を被り、手には剪定鋏が握られていた。そして両手には使い古されてかなりぼろぼろになっている軍手をはめられている。老人は二人を見てしょぼしょぼした目を細めると戸惑いがちに口を開いた。

「逃げないのかね」

「俺達インドアなんですよ。体力ないんです」

ウォルがやっぱり普段から鍛えておくべきですかね、なんとぼやきながらそう苦笑混じりに返せば老人は視線を落とした。

「この国は平和だ。長らく争いもない」

「それは良いことですな」

「そうだな。しかし平和すぎるあまり国民は国の内側を攻撃するようになってしまった」

「と、言いますと？」

老人が言うにはこの国は平和すぎるそうだと。人間は本質的に攻撃的な一面を持っているもので、争いが無いせいでその攻撃性は溜まりに溜まってしまっているらしい。その鬱憤は就任して間もない王にすべて向けられてしまっているとのことだ。

「シーナには会っただろう。王と彼女は交際をしておるのだよ。身分違いの恋というやつじゃ」

平和ボケした国民は王の発言を一言一言入念にチエックし、少しでも失言があれば揚げ足をとって責め立てることで留飲を下げていくのが現状だ。そう言った意味ではチエックとシーナの交際は絶好の批判の標的でしかない。王としての自覚が足りないだとか、身分の違いを知るべきだなどといった批判が毎日飛び交い、チエックやシーナ、弟であるナイトラへも度々飛び火して三人を疲弊させている。チエックはその現状をなんとか改善したくてクジュとウォルを呼びつけたのだそうだと。そう老人は説明する。

チエックの気持ちはわからないわけではない。国民がそんな調子なのならばシーナと別れたところでまた違う批判が飛んでくるのだろう。それならば国民のそういった感情を消してしまった方が早いと考えたのか。理屈はわかるがそう考えてもクジュにそれを実行することは不可能だった。協力してやりたいのは山々だが出来ないのだ。そんなことをクジュが考えていると説明を終えた老人が目線を上げて二人を見た。

「世間はそう言われますが、貴方達もそれが真実だと思われませんか

？」

「はい？ それはどういう……」

老人は意味が理解出来ないと首を傾げる二人に構うこともなく剪定鋏を持ち上げて仕事で戻って行った。ウォルが何度か声をかけて引きとめようとするが老人は止まらない。出てきた時と同じように木々の隙間を縫って消えてしまった。

「……庭師の言うことは本当なら」

「クジュ？ いきなりどうしたんですか？」

また顎に手を沿えて考えごとに没入し始めたクジュに声をかけるがクジュの反応はない。クジュはしばらく無言でいると独り言なのかウォルに聞こえるか聞こえないかくらいの音量で呟く。

「俺に消して欲しいものは……違う？」

どういう意味だろうか、ウォルには全く意味が理解出来ない。クジュも完璧に意味を理解して呟いているわけではないようなのだがそれでもわかつている限りのことは教えてもらいたい。そんな気持ちでクジュに問おうと口を開きかけたところで背後から気配がした。

「余計な詮索はやめていただきたい」

急いで戻って来たのかナイトラの息は乱れていた。それでも愛想が感じられない表情は崩していないのは流石を言うべきだろうか。どこから聞いていたのかはわからない。だが余計な詮索をするなど言う以上詮索されると困ることがあるのだろう。それが何かを問うたところでナイトラは答えはしないのだろうが。それがわかつているからなのかクジュは何を言うわけでもなく顎から手を離れた。考

えるのをやめたということを形で示したのかもしれない。

それに納得したのかナイトラは放置したことを謝罪しているのか
一礼してから申し訳ありませんでしたと心のこもっていない言葉を
口にした。

継ぎ接ぎ安全地帯

あれからシーナは仕事が忙しいそうでそれに代わるようナイトラが二人を監視した。世話などという暖かくも友好的な雰囲気は一切なく逃げ出さないように見張っているというのが最も相応しい。ウォルはなんとかナイトラと親しくなろうと努力はしていたが無駄に終わり、クジュはそもそもそんな考えは持っていなかったのでナイトラとは睨み合うことが多かった。何度となく訪れた一触即発の空気をウォルがなんとか抑えて、ようやく夕方になる。仕事で忙しかつたらしいシーナがようやく落ち着いてきたのか夕食であることを伝えに顔を出したことでようやく落ち着いた雰囲気になり始めた。

豪華な料理がずらり並んでいる中わずかな間ですっかり仲が悪くなってしまったクジュとナイトラがお互い目が合う度に数分睨み合う。それだけで殺伐としてしまう空気をなんとか壊そうとウォルは尽力した。

「シーナさんの作る料理はどれもおいしそうですね」

「ありがとうございます」

仕事中だからなのかシーナは空になった皿を下げたり、新しい料理を持ってきたりを繰り返すばかりで椅子に腰かけようとさえしない。仕事中なら無理に誘うのも良くないかと思いウォルが食事をしているナイトラが急に立ち上がった。

「ん？」

何事かとウォルがナイトラを見てみるとナイトラは舌打ち混じりに踵を返すと部屋を出て行ってしまった。二人が意味がわからず首を傾げているとナイトラの行動をシーナが補足した。

「また王から電話があつたみたいです」

そう言われて耳を澄ましてみれば確かに電話が鳴っているような……気がしなくもない。こんなかすかな音にナイトラはすぐに反応出来るのか。そんな風に感心していると乱暴に子機を取る音が聞こえた。余程機嫌を損ねているのか。

「ナイトラさんに愚痴でも言ってるんでしょうか？」

騎士と王なのだからもつと込みいった話もあるのかもしれないがウォルの発想慮奥では浮かぶのはせいぜいこのくらいだ。冗談半分で言ってみたのだがシーナは困ったようにそうかもしれないねとだけ言つて笑つた。

「この国は平和すぎて王が揚げ足を取られていると聞いた」

「そう、ですね」

「お前と王が交際していることで国民は我先にと嬉々して批判をしている」

「返す言葉也没有せん」

これまでどれほどの辛酸を舐めてきたのか彼女の表情が苦痛に歪む。それでもここに留まり続けるのは離れたくないからなのか、離れられないのか。第三者にそんなことが判断出来るはずもない。

「いつか状況が改善されるといいですね」

そんな当たり障りのないことをウォルが言つてシーナが頷く。状況を改善するためにここに呼ばれているわけなのだがそのことには互いに触れずに茶番のようなやり取りをいくつか交わした。

ウォルはクジュと旅をしている。旅を始めたのは数年前の話だがそれよりもずっと昔、気付けば物心ついた頃からクジュとは一緒にいたように思う。それでもクジュの全てがわかっていているわけではない。わからないことも未だに多い。今回もまたウォルはクジュの考えが理解出来ずに困惑していた。

あれから結局ナイトラは通話を続けていて戻ってくる様子はなかった。そのため食事を終えた二人は部屋へと戻り、一息つく。ベッドにダイブしたウォルをクジュが埃がたつという理由で咎めたが気にしない。これくらい自由にさせてもらわなければ息が詰まってしまう。

「クジュ、今回はよく喋りますね」

「……そうか？」

その返答で無意識だったのかと納得する。クジュは特殊な声をもっているせいで普段はほとんど口を開かない。しかし今回ここに連れて来られてからはクジュは当社比ではあるがよく喋る。そう言ったところでクジュは否定するのだろうかクジュが多弁になっているのは事実だ。これはずっと一緒にいたウォルだけが知っている。

「クジュは何が気にかかってるんですか？」

「……別に。ただの好奇心だ」

「そう」

これ以上問うてもウォルの求めているような返答はもらえそうもなかった。こうしている間にもこの呑気さが自分の首を絞めているのではないかと不安にあるがクジュが留まると言っただからクジ

ユの気が済むまだここにしようと思う。そんなことを口にすればクジユはこれ以上なく嫌そうな顔をして気持ち悪いことを言うなど、咳くに決まっているので言わないが。

「おい」

「ん？」

「ん？ じゃない。何寝ようとしてる。寝巻に着替える」

「いいじゃないですか。クジユは神経質すぎるんですよ」

「なっ……！？」

誰が神経質だ。憤慨したクジユがそう怒声を飛ばすよりも早くベツドに潜り込んで視界を覆ってしまう。クジユが何を考えているかわからなくて、教えてもらえない以上ウォルに出来るのは待つことだけだった。

そうしてウォルは深い眠りに落ちる。意識の端でクジユに頭を撫でられたような気がした。

泣き虫キング

今日は早くに目が覚めた。

時計を見ればまだ朝と呼ぶにはまだ早い気もする。退屈なのでウォルを起こそうかと考えたが「こんなに早く目が覚めるなんて歳とったんですね」と皮肉を返されるような気がしたので起こさないことにする。結局昨日と同じ服のまま眠ってしまったウォルを起こさないように慎重にベッドから出た。ベッドは別々だがあまり大きな音をたててしまえば目を覚ましてしまうかもしれない。身体をベッドから受けさせた瞬間にベッドが軋んで音をたてたがそれでもウォルが目覚めなかったことに安堵する。

早朝独特の冷気に身を震わせながら特に目的もなく部屋を出る。ゆっくりとドアを押し出して出来るだけ音をたてないように神経を集中させた。身体がなんとか通るくらいまで開けて、身体をその隙間に滑り込ませて部屋を出る。慎重にドアを閉めるがドアが完全に閉まった瞬間の金属音がやけに大きく響いてしまった。

何も考えずにとりあえず部屋を出てきたのでこれからどうしたものかと冷えた手に息を吐きつけながら考える。ふと、人影が目止まった。

「あ」

ちょうど角を曲がって死角から姿を現したのは昨日出掛けたチエツクだった。どうやら今帰って来たらしく昨日と同じ服を着ていた。睡眠を取っていないのか目にはうつすらと隈が出来ている。顔には疲労が色濃く浮き出ていたがクジュに気付いた途端それは笑顔に塗り潰されてしまった。

「よう、出迎えか？」

そういつた解釈が出来るとは幸せな脳をしているな、と思うのだが疲弊しているチエックに声を聞かせて更に疲れさせてしまうのも酷だろうと無言を貫く。チエックは気分を害した様子もなく歩み寄ってくる。遠目には気付かなかったのだが至近距離でその顔を見ればその顔には泣き腫らした跡があった。

「ん？ 俺の顔に何かついてるか？」

ぺたぺたと無遠慮に自身の顔を触りながら心配そうに問うチエックにどう答えたものかとしばし悩んだ後無言で目の少し下を指差せばそれで理解したのかチエックは「あー」と意味を為さない母音を吐き出した。それからばつが悪そうに頭を掻いてから目を逸らして口を開く。

「意外に泣き虫なんだよ。出来ればスルーしてもらえれば嬉しかったんだけどな」

そうは言うがそれなら顔を洗うなりして泣いた跡を消してくれば良かったのではないかと思う。わざわざ口に出して言うほどのことでもないで口にすることはない。

チエックは眠いのか大きく欠伸を零すと欠伸のせいで目尻に溜まった涙を拭う。

「で、どうだ？ 俺の依頼、受ける気になったか？」

「……何度も言うが現実的に考えて無理だ」

「そりゃ残念。それでも一応命令なんだがな」

脅迫か。クジュの声を聞いてしまったことで気分を害したのかチエックの足元がふらつく。体調が万全でない時にクジュの声を聞く

のは酷だろう。できればクジユも聞かせたくはなかったのだが返答しないでどうにかなりそうな問いではなかったのだ。不可抗力とは言えどこもあからさまに悪影響を受けてしまっているチェックを見て罪悪感を覚えないわけではなかった。しかしその罪悪感を押し隠してでもクジユには今の内に問っておきたいことがひとつあった。部屋に戻って睡眠でもとるつもりなのかクジユを通りすぎて歩き始めた背中に声を投げる。クジユの声を聞くことにチェックが体調を損ねてしまっているのがわかるがこれで最後だ。

「アンタが本当に消したいのは何だ」

どうにも妙だ。国民の反発的な感情を消してもらいたいという依頼内容は決して長く返答を待てるものではないはずで。それなのにチェックは催促はしてくるものの依頼を強制させる様子はない。ということはその依頼そのものがフェイクなのではないか。飛躍しすぎだとは思うがクジユはそう考えている。見当違いだと一蹴されればそれはそれで良し。ただの推測でしかないのこうして鎌をかけてチェックの反応を窺ってみる。反応はあまり期待していなかったのだが疲弊していたためか、それとも二人きりだったためかチェックの反応はクジユの予想とは異なっていた。

「さあ？　なんだろうな」

否定をしなかった。その返しは本当に消したいものは別にあると言っていることを同義だ。そしてチェックはそれをわかった上で発言したように思えた。どう返答したものか。だがこれ以上会話をしチェックを無駄に弱らせるのも気が引ける。そんなクジユの躊躇を察してかチェックは振り向かないまま手を耳あたりまで持ち上げる

と何度か軽く振ってまた歩き始める。

ちやりちやりと衣服の装飾が擦れる音が廊下に響き渡った。

お約束のごとく

この日はいつもより遅く目が覚めた。

昨日着替えないままに寝てしまったせいで寝付くまでに時間がかかってしまったからなのかもしれない。ウォルが目を覚ました時、既にベッドにクジユはいなかった。クジユの方が先に目を覚ますことは決して珍しくはないので気に止めない。とりあえずベッドから抜け出てクジユを捜すべく部屋を出ることにした。体重をかけてドアを押し出して廊下に出る。クジユの姿はない。さて、どこに行ったのだろう。

「あの、クジユ様をお捜しですか？」

躊躇いがちにそう声をかけられて慌てて振り返れば洗濯物を大量に抱えたシーナが歩いていった。洗濯物は彼女の顔の半分を覆ってしまっほどもで積もっていた。視界が悪そうな彼女をそのまま放っておくのも気が引けて洗濯物の上半分を奪い取るようにして請け負う。

「半分持ちますよ」

事後承諾になったのはわざわざ許可を取っていれば彼女が遠慮をして手伝わしてくれないのではないかと考えたからだった。

「え、いえ！ 大丈夫です！ お客さんに持たせるのは申し訳ないですし」

「俺がやりたいだけなので気にしないでください。で、これはどこに持って行けばいいんですか？」

シーナの言葉を無視するようにしてそう答えた後、更に問いを畳み掛けることで彼女の遠慮をこれ以上口に出させないようにする。それをどこまで察したのかシーナは「そういうことでしたら」と言っ
て運ぶ先をウォルへ教える。シーナと一緒にウォルがそこへ向か
おうとしたところで前方に見慣れない影を見つけた。

「ん？」

影はひとつではなかった。彼等は厳格そうな衣装に身を包み、それ
までしてきた苦労を見る者全員に伝えるかのような白髪をしていた。その間から時折白く染まりきっていない黒髪が覗き見える。彼
等は三人。いずれも気難しそうな表情をそれぞれに作っていた。

彼等は一体誰だろうかとウォルが問おうとシーナに目をやったところ
で驚きのあまり硬直する。シーナは目を見開いて彼等を真つ直ぐに見ていた。わずかに開いた口からは何かが発されることはない
が何か発するとするなら悲鳴。そんな印象をウォルが抱いてしまう
ほどシーナの瞳には恐怖が色濃く宿っていた。

「……シーナ君」

彼等の一人のがさついた唇が動く。ただ名前を呼んだだけなのに
その声音には批難が含まれているように思えた。そう感じたのはウ
オルだけではなかったらしくシーナは勢いよく頭を下げるとすぐに
上げて廊下の端へと移動した。どうしていいのかわからずウォルも
それに倣って廊下の端へ行く。

「王でしたら自室にいらつしやると思いますのでいつもの部屋でお
待ちください。お呼びして参りますので」

緊張しているのかシーナは早口でそう捲し立てる。余程彼等が怖

いのかシーナは彼等を見ようとしない。彼等はそれに気分を害したのか隠しもせずに舌打ちをするとシーナとウォルの前を肩で風を切りながら通り過ぎて行く。シーナの前を通り過ぎ、ウォルの前を。

「君」

「はい？」

てつきり存在していないもののように声もかけられないのだばかり思っていたので急に声をかけられて間抜けな声が出た。目が合ってしまったように逸らし続けていた視線を咄嗟に彼等に合わせれば何の感情もこもっていない無機質な瞳達と目が合った。

「っ！？」

「君は客人かね？」

「……まあ、そんなところです」

厳密には拉致というか誘拐というか。彼等がどこまで知っているのかわからないので曖昧にそう返す。彼等は決して興味がないのかすぐにウォルから目を逸らした。

「そうか。それならゆっくりして行くといい」

まるでここを自分の家のように言う。そのことに言いようのない腹立たしさを覚えながらも無難な返しをする。わざわざ喧嘩を売るなんてクジユみたいな真似をするわけにはいかなかった。

「ありがとうございます。そうさせてもらいます」

そんな心にもないことを言えば聞いていたのかいないのか彼等はウォルの前も通り過ぎて行く。彼等が澁みない足取りで角を曲がり、

姿が見えなくなったところで金縛りから解けたようにシーナが動いた。

二、三步後退って壁に身体が当たる。洗濯物を抱えた両手は小刻みに震えていた。

「シーナさん？」

「あの、洗濯物、お願いしてもいいですか。急用が出来てしまって」

ウォルの返答を聞くよりも早く持っていた洗濯物を全てウォルの持っていた洗濯物の上に乗せて、一礼をする。頭を下げたことで垂れ下がった髪を掻き上げてから彼女はウォルが口を挟む暇もなく走り去ってしまった。

「えええ……？ いや、まあいいんですけどね……」

結局クジユの居場所を聞くのを忘れてしまった。そんなことを今更考えながらとりあえずこの洗濯物の山を運び終えてしまおうと歩き出す。

「おっ、と……」

ずり落ちそうになる洗濯物を抱え直して再び足を進めた。

主に喧騒

暇過ぎるあまりクジュは官邸を徘徊していた。チェックは眠ってしまったようだし、シーナは忙しそうだ。ナイトラとは会いたくない。シーナが鍵のかかっている部屋なら自由に出入りしても構わないと許可してくれたのでお言葉に甘えて部屋という部屋に足を踏み入れることで時間を潰していた。

もうそろそろウォルが起きてくる時間だろうか。それならばもう戻ってもいいかもしれない。あらかた徘徊したので飽きもきた。元来た道に戻ろうと踵を返すと何やら物音が聞こえてきた。好奇心が打ち勝つてしまい、思わず曲がり角に隠れて身を潜める。

「またか。……わかった。シーナ、ありがとう。ナイトラ、悪いが一緒に来てもらえるか」

「御命令とあらば」

「またお前そういう堅い返しをだな……」

「王、あまり大臣を待たせては……。私は外で待っていますから、その、すみません」

「なんでシーナが謝るよ」

チェックとシーナとナイトラがそんな会話をしながらどこかへ向かっている。このままではクジュの潜んでいるところを通るので見つかってしまうだろう。やましいことは何もしないで偶然通りがかった風を装えばそれでいいのかもしれないが一度隠れてしまった手前その方法をとることは躊躇われた。そのため三人に見つかってしまわないように角を少し行ったところで適当な部屋に身を滑り込ませる。部屋に入ってしまったことで音での情報しか拾えなくなってしまうがそれでも充分だろう。

「第三十二代国王・チェック。参りました」

クジユが入った部屋の一つ手前の部屋で立ち止まったらしいチェックはそう告げると部屋へ入って行く。それに続いてもう一人入室したようだった。護衛をしていると言っていたのでおそらくはナイトラだろう。それならシーナは廊下で待機しているのだろうか。見ることが出来ない分、どうしても推測の域を出ない。

「一か八か近付いてみるべきか？」

いや、しかしそれでは野次馬のようではないか。そんな真似は御免被る。プライドが邪魔してクジユが動き出せないうちにあちらの状況は移り変わっているようだった。

「——だ！——と言って——」

「ですから、俺は——しか——」

どうやら二人が怒鳴り合っているようだった。一人はチェックだろう。そしてもう一人はわからない。先程シーナが大臣がどうのと言っていたので大臣かもしれない。最初は二人のどなり声ばかりが響いていたが次第に怒鳴り声は増えていった。壁があるせいで内容までは聞き取れないが声が増える度にチェックが不利になっているようなのはなんとなく察することが出来た。

「……」

どういう状況なのかというのはよくはわからない。もしかするとチェックの自業自得なのかもしれないし、大臣に難癖をつけられているだけなのかもしれない。部外者であるチェックにはそれを判断することは出来ない。それが歯痒くもあるが仕方ないことだ。糾弾

されているらしいチェックに同情を覚えないわけではないがだからと言ってどうすることも出来ない。

クジユはどうすることも出来ずにしばし身を潜め続けていると怒声はだんだんとおさまっていき最後には聞こえなくなった。落ち着いて音量を下げて話すことにしたのか、会話自体が終了したのか。しばし沈黙が続いたかと思えばドアが重々しく開く音が届いた。ドアが開け放されたおかげが会話を聞きとることが出来る。

「何度もしつこく言いますが貴方は王なのです。いつまでも駄々を捏ねていては国民に示しがつきませぬぞ」

何度も繰り返し言われ続けてきたことなのかチェックは聞こえないとばかりに返事をしない。それに対して憤っているのか大臣達はクジユにさえ聞き取れるほど乱暴な足取りで部屋を出て行ったようだった。大臣の気はどうにも治まらないようで憤りは脇に控えていたらしいナイトラにも飛び火した。

「君も頑固な主君を持つと大変だな」

「仕事ですから」

「……ふん」

ナイトラの冷めた反応が気に入らなかったのか大臣は鼻を鳴らす。その足音はどんどん遠のいて行った。シーナの見送りを断って帰って行く大臣達はシーナを嫌っているのだろう。そう思えるほどに彼等のシーナへの対応は冷めきっていた。大臣達の足音が聞こえなくなったあたりでシーナがチェックの名を呼んだ。

「チェック、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。心配すんな。俺の方こそいつも、」

「王、それ以上は」

チエックが何かを言おうとしたところでナイトラがそれを遮る。緊張感を纏ったその声はこちらへ向けられているのではないかと錯覚してしまうほど鋭かった。実際、ナイトラの意識はクジユに向けられていたのかもしれない。クジユの気配に気づいていたからチエックの言葉を遮った。そう思えばますますクジユにはナイトラが気に食わなかった。

「チツ……」

それでもこれまで三人に対して持っていた違和感はクジユの中で確実に拡大しつつあった。出来ればウォルが何も察することがないまま終わってほしいのだがそれは難しいだろう。

「あー……」

絶えず呟くことで自身の声に侵食される不快感を味わいながらもクジユはその場に丸まって頭を抱えた。じわじわと内側から侵されていく感覚が思考力を奪っていくが今はこれぐらいがちょうどいいのかもしれない。

NOT以心伝心

「あ、クジュ。どこに行ってたんですか？」

「それはこっちの台詞だ。部屋にいなかったら」

「シーナさんに頼まれて手伝いをしてたんですよ」

呑気にウォルがそう言うので一気に疲れが襲ってくる。部屋まで戻ってきてウォルの姿が見当たらないことにクジュが動揺していると何食わぬ顔でウォルが戻ってきたのだ。長い間息を殺していたせいかクジュがかなり疲れ切っていた。おまけにウォルと離れていたので自身の声に侵されたままになってしまっている。気持ち悪さのあまり額に汗が滲む。吐き気すらも襲ってくるが吐いても楽にならないのはわかっていた。

「ウォル、何でもいいから喋れ」

一々説明するのが面倒でそれだけ言えばウォルは状況を察したようだった。ウォルはクジュにとつてなくてはならない存在だった。クジュの声は特殊で聞いたものの神経を次第に侵していく。それは声の主であるクジュも例外ではなく、そうなれば一番被害が大きいのはクジュであるはずだった。しかし幸運なことにウォルはクジュとは正反対の性質を持っていた。クジュの声質が穢すことならウォルの声質は浄化することだった。

「さっきナイトラさんがクジュのこと搜してましたけど何かしたんですか？」

答えない。やはりナイトラは気付いていたらしい。そうでなければあの愛想のない人間がわざわざクジュを搜すはずがない。ウォル

も何か感づいてはいるのだろうがそれ以上は聞いてこない。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声はクジユの中に堆積するどす黒いものを浄化していった。ただ、ウォルの声も悪影響を全く及ぼさないわけではない。クジユの声がクジユ自身を侵すようにウォルの声はウォル自身も浄化を始めてしまう。

「……もついい」

気分の悪さが消え失せたところでそう言つて手を軽く振る。それでもまだ口を開こうとするウォルの口を手で塞いで黙らせた。中途半端に口を開いたせいでウォルの口からはおかしい声が漏れる。

わざわざこちらからナイトラに会いに行く必要もないだろう。用件があるのならあちらから来ればいいと思う。奴等はまだ二人を殺さない。目標を達成していないからだ。それがわかつているからクジユは布団にもう一度潜り込む。体調は万全ではないし、起きていたところあの三人のいずれかに監視されて窮屈な一日を過ごすことになるのだろう。それならば寝ていた方がよっぽど有意義だ。

どうしていいのかわからず戸惑うウォルの腕を掴んで布団の中へ引つ張り込んだ。困惑を滲ませるウォルに気付かないふりをしてその腕を離すまいと力を込めればウォルが諦めたらしく脱力した。それに満足してからクジユはこれからどうするべきかと考える。どうにも彼等は何かを隠しているような気がするのだ。それがわからない以上はどう動いていいのかわからない。それがもしクジユの手に負えないようなものだったとしたらなんとしてもウォルだけは生かさなければと思う。そしてその誓いをウォルに気取られてしまわないように早々に目を閉じると眠りに身を委ねた。

うっかり絶体絶命

ここ数日は窮屈な思いをして過ごした。

逃げ出さないようにするためなのかほぼ二十四時間二人には誰かの世話係という名の監視が張りついていた。クジュなどは露骨に嫌そうな顔をしたがウォルはさほど苦痛には感じていなかった。というのもチェック以外からは依頼の話を一切されないからだろう。クジュはナイトラを嫌っている上になんだかチェックを避けているようで、どちらかが監視につくと嫌な顔をする。でも何やら忙しいのかチェックとナイトラは片方、もしくは両者が不在であることが多かった。シーナにそれとなく聞いた話によれば民衆の不満が爆発寸前で王であるチェックとその護衛であるナイトラは多忙なのだそうだ。

それならば何故クジュに依頼を受けるように催促をしないのか。例えばウォルを人質にとつて脅すだとか、無理に従わせようとするなら方法はいくつかあると思うのだがチェックはそれらを実行しようとする様子はなかった。ウォルにはそれが不思議で仕方ない。今こそクジュを使う時ではないのだろうか。わざわざそれを指摘してこちらが不利になる必要もないかと思ひ口を噤んでいるのだが官邸にいる全員がそれに気付いていないとは到底思えなかった。

そして今日は今日で何かあつたらしくチェックが正装で一番豪華そうな部屋へ入って行くのを見かけた。それにナイトラとシーナが続く。特に大人しくしているなどという指示はなかったのでウォルは物音を極力たてないようにクジュの元へと急いだ。靴と床が擦れて音をたてないように足を上げて、音をたてないように足を床に下ろす。その作業を何度も繰り返してなんとかクジュがまだ寝ている部屋へと辿り着く。最近クジュはやる気がないのか自堕落になってしまっていた。

「クジュ、起きてください」

あまり声を大きくしてしまわないように注意しながらクジュが潜って膨らんでいる布団を軽く叩く。しかしクジュが起きる様子はなくわずかに身じろぎをしただけだった。素直に起きてくれるとは思っていなかったので仕方なくの端を握る。それから下から上へ持ち上げるようにして布団をクジュから引き剥がす。布団の中で丸まっていたクジュは差しこんできた太陽光が眩しかったのか目を細めた。

「……眩しい。布団おろせ」

「起きてくださいよ」

クジュの苦情は無視して先程見たものを話す。いつもと様子が違ったことを強調して話すと食いついてきたのかクジュが身を起こした。それでもまだ眠いのか目は半開きで眉間には不機嫌さからくるのか深い皺が刻まれている。起こされて不機嫌になるのなら自分で起きればいいのではないかと思う。

「……寝巻なんだが」

「知らないですよ。俺だって寝巻ですし」

着替えの場所を知らないのだから着替えようがない。それに寝巻といってもほとんど部屋着に近いもので一見しただけで寝巻だと気付かれてしまうことはないだろう。要はクジュは気にしすぎなのだ。渋るクジュの手を取れば観念したらしくベッドから緩慢な動作で出てきた。

「俺達的能力が透視だったりすれば部屋の中堂々を覗けるんですけどね」

「で、また余計な代償背負うつもりか？」

「別にそういうわけじゃないですけど」

ウォルとクジユは、特殊な力を持っている代わりにそれを使用する度に相応の代償を負う。ウォルは授かった以上仕方のないことだと割り切っているのだがクジユはそうでもないようだ。未だにウォルとクジユ自身の能力を毛嫌いしている節があった。それなのに能力のことについて軽々しく話すウォルが気に障ったのだろう。それは悪かったと思う。でもそんなに怒る必要もないのではないかと思う。寝起きで不機嫌だからといって八つ当たりはやめてほしい。

三人が入って行った部屋まで案内するためにウォルが先を歩く。そういえばこの官邸は相当に広いはずなのだがあまり人を見かけたことがなかった。今までは誰かが必ずと言っていいほど監視にしていたのでそこまで意識はしていなかったのだがこうして二人きりになってみるとこの官邸の静けさは異様だった。靴と床が擦れる音さえもこの静寂の中ではひどく大きく響いてしまう。足跡を潜めていたいこの状況からすれば煩わしいことこの上ない。文句を呟くことも憚られてただ目的の部屋を目指して足を進める。背後でクジユが緊張感なく欠伸を漏らした。

「ここです」

無駄に長い廊下を通過して突き当たったドアを指差せばクジユがもう一度欠伸。本当にやる気が感じられない。こんなことなら一人で来るべきだったかもしれない。ウォルが早くも後悔し始めているとクジユはウォルより前へ進み出ると音もなくドアへ張りついた。

「ちよつ、クジユ？」

ドアの向こうに悟られてしまわないように声を抑えながらクジユの行動を咎める。気付かれてしまったら最後、殺されかねない状況

に自分達が置かれているということを知り、クジユは自覚しているのだろうか。否、自覚していないに違いない。クジユを引き戻そうと手を伸ばしたところでクジユがそれよりも早くドアの隙間に手をのばした。そろそろと隙間に指を差しこんでわずかな隙間を作ったクジユは顔を近づけて中を覗きこむ。

流石に二人で覗くのは勢い余ってドアを開けてしまふなんてお約束なパターンに陥ってしまいそうなのでウォルは隙間から横へずれた。あちらの視界に万が一にも入ってしまったくないようにするためだ。

中央の豪華そうな椅子には王であるチェックが深く腰掛けていた。その横には剣に手を置いたナイトラが控えている。その少し離れたところにはシーナが壁沿いに遠慮がちに控えていた。そしてチェックの正面には腰に剣を携えた使者が跪いている。

流石は王と言うべきかこれまでクジユはチェックに対してあまり厳格なイメージは抱いていなかったのだがその表情は固く引き締められていて、普段のだらしない雰囲気は一切感じられなかった。ナイトラは普段と変わらず仏頂面ながらも使者に遠慮のない殺意を飛ばしていた。射るような目はそれだけで使者を殺してしまいそうだ。シーナはここにいることが場違いだということがわかって居るのか居心地が悪そうに視線だけを泳がせていた。

「この度は如何様か」

普段はどこか間延びした喋り方をするくせにチェックは淡々とその使者へ問う。その声音には一切優しさといった類のものは含まれていないようだった。いつもこんな調子なのか、それとも今回が特別なのか。

使者は特に怯んだ様子もなく「はっ」と口にすると顔を上げてチェックと目を合わせた。

「何度か忠告させていただいたあの件について大臣より伝言を預かっております」

「やっぱりそれか」

何度も言われ続けていることなのかそれを聞いた途端チェックがうんざりした顔を作る。シーナが申し訳なさそうに俯くがナイトラの表情に一切変化は見られなかった。主君と姉の問題だというのに随分冷めた反応だと思いがクジュにとってそんなことは大した問題でもない。

使者はチェックが露骨に聞きたくないといった表情をしているにも関わらず続けた。子供のように感情をすぐに表情に出してしまうチェックを快く思わないのか咎めるように「王」と呼んでから使者は続けた。

「我々も王の御意志を尊重したいのです。しかし身分を越えてはなりません。これはこの国が遙か昔より遵守してきたことです。それを王が易々と破ってしまうわけにはいかないのです。どうか御理解を」

理解を乞うように再び頭を垂れた使者をチェックは困り果てた表情で見下ろす。どう返答するべきか迷っているのかその憂鬱を凝縮したように思われる深い溜息を吐き出した。

「何度も言ったとは思いが俺は譲るつもりはない」

「……そうですか。それで国民の不満が募ったとしてもですか？」

「どうせ何してもぶーぶー言われるなら好きなようにさせろ」

何度も同じやり取りを繰り返してきたのかチェックの言葉にはあきらかな疲弊が含まれていた。その返答を聞いて使者が申し訳なさ

そつに目を伏せる。

「そうですか。では仕方ないですね」

使者は視線を落したまま腰の剣へ手をやる。それを一瞥したナイトラの眉間に皺が寄った。そしてチェックは逆に面白そうに口端を吊り上げる。よく事情を知らないクジュにもこの後の展開は安易に想像出来たがチェックはそれを楽しんでいるようだった。

「で、どうするんだ？」

おかしくてたまらないとばかりに口許を緩めるチェックをナイトラが横目で睨みつける。それもそうだ。守るべき者がこつも緊張感を欠いていれば守りにくい。毎日こんな様子のチェックを守っているのかと思うとナイトラに同情してしまう。

「はい、それならば」

鯉口を切った使者は先程までの申し訳なさそうな表情に無表情を上塗りした。それを視認したナイトラが剣に手をかけたのと使者が動き出したのは同時だった。

「消えてもらうまでです！」

剣を引き抜いた使者が床を蹴って駆け出す。ナイトラはチェックを守るために庇うように前に立ちはだかると剣を引き抜く。しかし使者はそれを一瞥すると方向転換をして再び駆け出した。使者の視線の先にいるのはシーナ。最初から使者の狙いはシーナだったようだ。チェックがシーナの名を叫び、ナイトラが舌打ち混じりに使者の背中を追う。シーナは恐怖に震える足を叱咤して逃げ出すがその

時点で使者はかなりの距離を詰めていた。足をもつれさせながらもなんとか逃げていたシーナは動揺のせいかバランスを崩し、床に転がってしまふ。彼女の眼前にまで迫った使者は剣を振り上げた。しかしそれを振り下ろすよりも早くナイトラアが追いつき剣を構える。剣を振り下ろすのを阻止しようと動き出したところで使者は素早くナイトラへ方向転換すると振り上げていた剣をナイトラへ斜めに振り下ろした。ナイトラはすかさず後方へ飛び退いたが攻撃の全てを回避することは出来ず、剣の動きに沿って服が裂け、赤い線を作りだす。

「最初から、これが狙いか」

「王の騎士は大変優秀だと聞いておりましたので」

ナイトラの呟きでクジユはようやく理解する。チエックを殺そうとしたところでナイトラが妨害するのはわかりきっている。だから先にナイトラを始末してしまわなければならない。だから使者はシーナを狙ったと見せかけてナイトラが来たところを素早く身を翻してナイトラに目標を定め、傷を負わせた。ナイトラの行動を予測していないと出来ない計画ではあるが使者の読み通りに動き、傷を負った。傷口は深くはないようだが血が重力に従って滴り落ちている。

「利き腕の負傷は多少なりとも貴方に不利に働くはずです」

「利き腕の負傷如きで護衛がつとまらなくなる者は騎士とは言えない。王の騎士を甘く見るな」

使者の挑発に冷たく返したナイトラは使者に攻撃を仕掛けるがやはり利き腕の負傷は大きいようで使者に軽々と受けられてしまった。舌打ち混じりにナイトラは身を引いて耐性を整える。使者は優勢にも関わらず気は抜いていないようでナイトラを睨みつけていた。

「ナイトラ、もういい！ 下がれ」

「ふざけんな。もういいってなんだ、死ぬ気がアンタ」

チェツクの言葉に対してナイトラは一瞥されることもなくそう返した。最早王に対する言葉遣いではないのだがそれに対する疑問を投げる者はこの場にはいなかった。そんな余裕がないと言った方が正しいのか。二人が戦っている間に起き上がっていたシーナはチェツクの傍まで駆け寄るとチェツクに逃げるように促した。しかしチェツクは首を横に振る。そして逃げるどころか睨み合っている二人の方へ歩み寄った。

「王！ お戻りください！ 駄目です！」

シーナは叫ぶが恐怖で動けないのか直接チェツクを引きとめることはしない。それをいいことにチェツクは未だにお互いに牽制を続ける二人の間に割って入る。本来なら制止しなければいけないはずのナイトラもあまりに唐突な行動に呆氣にとられているようだった。しかしすぐに正氣に戻ったようでチェツクの肩を掴むと強引に後ろへ下がらせようとする。だがチェツクが動く様子は見られなかった。チェツクは使者を真っ直ぐ見据える。

「それが国の方針なら仕方ないな。殺したいならさっさと殺せばいいだろ」

疲弊しきった表情で言うチェツクの言葉は本音だろうか。クジユの位置からは使者の顔は見えないがそれでも動揺は伝わって来た。それでも使者の任務はチェツクを抹殺することだ。それを違えることはないだろう。その証拠に使者は剣を強く握り直した。そして剣を突き出そうとしたところでナイトラがチェツクの首根っこを掴んで思い切り後ろへ引き倒す。

「うおっ!？」

「倒れてろ、馬鹿王」

ナイトラは腰を落とすと使者の突きを回避する。それから剣を逆に構えると柄を使者の鳩尾に埋め込む。突然のことに使者がくの字に折れ曲がった。今の一撃で使者は意識を失ったのか体重全てがナイトラにかかる。ナイトラはそれを軽々と受け止めると刀を戻してからクジユを睨みつけた。

「この馬鹿が。アンタ今何しようとした」

これは確実に王に対する態度ではない。しかしチェックはそれを咎めない。それはシーナも同じで、ただシーナは心配そうな目で二人を見ているだけだった。視線だけで殺してしまえるのではないだろうかと錯覚してしまうくらい怒気が含まれたナイトラの視線をチェックは軽々と受け流す。それからナイトラに身体を預ける使者を一瞥した。

「それよりもそいつどうするか考えようぜ。始末すればそれこそ問題になっちまう」

わざとらしく話題を逸らしたチェックにナイトラが盛大な舌打ち。チェックはそれを無視すると顎に手を置いて考え事を始めた。シーナはしばらく状況に追いつけず固まっていたがナイトラの傷に目がいくと弾かれたように走り出した。

「救急箱取ってきます!」

あまりに突然の行動で慌てたのはクジユの方だ。慌てて周りを見

渡すが隠れられそうなどころはないし、別の部屋に隠れようにも部屋まで移動している間にこちらに向かってくるシーナの視界に入ってしまう。どうしたものかと考えたのは一瞬でどうするべきかなんて決まっていた。

「へ？　ちよつ、クジユ」

咄嗟のことでウォルが制止しようとするがそれを無視してドアを思い切り押し開けた。同時にシーナが引き攣った悲鳴と共に足を止め、チェックとナイトラが驚愕の表情でこちらを見ている。どうやら今回は気付かれていなかったらしい。三人が直面している問題を解決する提案をしてやろうと思ったが声のせいで憚られて、振り返ってウォルに視線を投げた。まだ隠れていたウォルはそれで観念したのかドアの陰から申し訳なさそうに姿を現すとクジユの考えている提案をクジユに変わって口にした。

「お困りのようですね。皆さんご存じかと思いますがクジユはちよつと特殊なんです。よろしければ協力しますよ」

そう言っではみるもののクジユの考えが読めないのかウォルは不安げな視線を投げてくる。だがそれを今わざわざクジユに伝える必要はないだろう。その視線には気付かないふりをして三人を見た。何を隠しているのか知らないがこの機会にさっさと暴いてしまおう。こんなところにもいつまでも留まっているほど暇ではないのだ。

整理整頓

ソファーに身を投げ出したクジユはぐったりとしていた。全力疾走した直後のように身体は汗ばんでいて息苦しうに時折咳き込む血の気が引いて青褪めている顔を両腕を交差させることで覆い隠して息を整えることに専念している。そんなクジユに声をかけることはせずにウォルはウォルのやるべきことをすることにした。

「おい、大丈夫なのか？」

「あの、何か持ってきてましようか？」

チェックが心配に表情を曇らせ、シーナが腰を上げる。しかしウォルはシーナを制した。

「いえ、大丈夫です。あれをやった後のクジユはいつもこんな感じですから。しばらくすれば治りますし」

喋る余裕もないのか黙り込んでいるクジユの背中をさすりながらそう説明する。

先程チェックを抹殺しようとした使者は捕獲され、彼をこれからどうするべきか審議されていた。そこでウォルがクジユの指示により提案したのは使者の記憶を消してしまうことだった。そもそもクジユが記憶を消すことが出来るということを知った上でチェックが連れてきていたのだからその辺りの説明は省くことが出来た。いくつかの手順を踏んで使者の記憶をクジユが消し、解放した。その反動というか副作用でクジユはこうして体調を崩しているわけなのだがそれを見慣れているウォルからすればそこまで心配することでもない。心配は心配なのだが治るとわかっているものに気をかけすぎても仕方ないだろう。

「それよりさっきからナイトラさんの姿が見えないんですけどどう

かされたんですか？」

使者を送り返した後、チェックとシーナは弱ったクジユを休ませるために部屋に案内してくれていた。クジユを支えながらこの部屋で休ませてもらっていたので最初は周りを見渡す余裕もなかったのだが次第に余裕が出来てきたところそのことに気付いた。

「あれ？　そういえばさつきから見ねえな。シーナ、知らないか？」

「……　そういえば、私も見てないです」

「そうか」

シーナの返答を受けてチェックは立ち上がった。同じ姿勢でいたせいで身体が固まっていたのか両腕を上突きあげて背伸びをする。と踵を返して部屋を出て行った。どうやらナイトラを捜しに行ってくるらしい。少しくらい説明をしてくれてもいいのではないかと思うのだがシーナは慣れているのか何も言わなかった。

「お茶でも淹れますね」

部屋の隅の棚に置かれているポットを掴むとその横に置いてあるティーポットに茶葉を適当に放り込んでからポットの上部を押してお湯を注いだ。各部屋を見て回って思っではいたのだがどうやら全部屋にポットとティーポットが置かれているらしい。湯の入れ替えが大変ではないかと思うのだが。シーナはカップを二つ棚の中から取り出すとティーポットを少し傾けた。褐色をした液体がティーカップからカップへ注がれる。慣れた手つきに感心しているとシーナはその視線を受け流しながら一つ目のカップに注ぎ終え、と二つ目のカップに注ぎ始める。

「すみません、いつも騒がしくて」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりも少し聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「私が答えられる範囲なら」

シーナが微笑みながらそう返してくれたのでクジユを一瞥してから口を開く。どうやらクジユはまだ喋ることが出来る状態ではないらしい。先程よりは落ち着いたようだったが未だに顔色は悪くぐったりとしていた。

「ナイトラさんはチェックさんが嫌いなんですか？」

「私の口からはなんとも。本人から聞くのが一番いいと思います」

シーナは自分の口からその問いに答える気はないらしく注ぎ終わったカップをクジユとウォルの前へ置いた。仕事だからなのか笑みは絶やさない。お茶をありがたく受け取って啜りながらクジユの肩を叩いてお茶をいただいたことを知らせる。すると両手を顔から離して一度深く息を吐くと背中をソファーから離してカップを手に取った。未だに顔色は悪い。カップに口をつけてちびちびと飲み始めたクジユの視線は下がっていてシーナを見ようとはしない。体調の悪さを押し隠すように深呼吸を何度か繰り返してからクジユは顔を上げてシーナを見た。その表情は彼女の小さな変化も見逃すまいとしているようでシーナは困惑した表情でウォルを見る。助けを求められているのだろうか。しかしウォルにもクジユのはっきりとした意図はわからないので助けようがない。

「……お前は？」

「はい？」

クジユが口を開くことは予想していたのかシーナは怯える様子もなくクジユを見た。わかっていてもクジユの声を不快に感じてしま

うのはどうしようもないらしくその額には汗が伝った。それを見てこれ以上言葉を重ねるのは酷だと思ったのかクジユはカップを両手で持った体勢のままちらりとウォルを一瞥した。意味を理解しきれていないシーナに質問を補足して伝えろということだろうか。それ自体は構わないのだがウォルがクジユの意図を汲みとれていないという可能性を考えていないことが気にかかった。しかしそれを問っても仕方がないのでクジユの指示通り補足を請け負おう。

「シーナさんはチェックさんのこと好きなんですか？」

シーナとチェックは付き合っているという。それならば当然シーナはチェックを好きなのはずだ。この質問に意味があるとは思えない。しかしクジユがこんな質問をするということは意味があると感じているからだろう。どうせ問い詰めたところで真意は教えてもらえないのだから大人しく指示に従っておこうと思う。

「わ、私は……」

シーナは質問を受けてかなり動揺しているらしく目を絶え間なく泳がせた。唇は小刻みに震えていて言葉を発することも難しいようだ。当然の質問をしたただけなのにシーナがここまでうろたえる理由がウォルにはわからなかった。クジユにはわかっているのだろうか。そんな思いを抱きながらクジユを見ればクジユは睨むようにシーナをまっすぐに見ていた。そこに感情が込められている様子はなく、下手をすれば淡々とした殺意すらも感じた。

「クジユ、その顔怖いです。シーナさんが怖がつてるじゃないですか」

実際にシーナが怖がつているかどうかはわからない。だが他者を

そんな目で見るというのはどうかと思う。言外にそう非難したのだ
がそれがクジュに伝わったかどうかはわからない。クジュの反応を
知るよりも早く、異変が起こったのだ。

空気を切り裂くように強烈な破壊音が響いて思わずウォルは身を
竦ませる。何かが割れたのは確かだろうがそれが何かを特定するこ
とは出来なかった。陶器か何かだろうか。それよりも今一番気にな
るのは音が聞こえてきた方向だ。

「えーと、俺の記憶が正しければチェックさんが行った方向から音
が聞こえてきたと思うんですけど」

控えめに意見して自らの記憶が正しいという確信を持つとすれ
ばシーナが今にも躓きそうな危なっかしい動作で部屋を出ようと駆
け出した。クジュも未だに具合が悪いながらもそれに構うことなく
シーナの後を追う。しかし身体が重いのはどうしようもないのかそ
の足取りは緩慢だった。それに苛立ったクジュが舌打ちを漏らすの
で肩を貸して歩き出す。手を借りることが気に入らないのか悔しげ
な表情をされたが言い合っている場合でもないので気付かないふり
をしてシーナの後をゆっくりとした足取りで追うことにした。

秘密

二人がシーナに追いついたのは五分ほど後だったと思う。ここは無駄に広いので追いつくのにやたらと時間がかかってしまった。まだ事態は収拾していないらしく怒鳴り声が響いていた。

「シーナさん、大丈夫ですか？」

クジユを半ば引き摺るようにしてなんとか追いつけばシーナは扉近くでどうしていいのかわからずひたすらに周りをうろついていた。何度かやめてくださいという悲痛な叫びが聞こえてきたがチェックとナイトラはそれに耳を貸していないようだった。

クジユを離して、クジユが壁に寄り掛かったのを見届けてから部屋の中を覗けば漫画のようなタイミングで目の前を陶器がもの凄いスピードで通過していった。鼻先を掠めた陶器は減速しないまま廊下の壁に直撃して粉々に砕ける。驚きのあまり身体を仰け反らすが当の本人たちは全くこちらのことなど気にしていないようだった。

「こんつの馬鹿が！ 王が騎士庇おうとしてどうする！」

「お前こそ王になんて口ききやがる！ お前なんて騎士失格だ！」

「はっ、なんとでも！ どうせ俺は騎士失格だ。で、それが何か？」

喧嘩の内容は理解出来るような、出来ないような。どうやら先程チェックガナイトラを庇うような動きを見せたのがナイトラの怒りに火をつけているようだった。しかしそれだけでここまで身分を無視した大喧嘩が勃発するものなのだろうか。ウォルには理解出来ない。クジユは壁を支えに何とかドア付近まで歩いてくると中を覗きこんだ。

部屋の中は酷い有様だった。お互いに投げつけたと思われる陶器

などの残骸は部屋中に散らばっていていつ怪我をしてしまわないとも限らないような状態だ。武器まで持ち出して喧嘩をしていたのか棚には真新しい切りつけられた傷がいくつも見受けられた。しかし武器は二人の手元にはなく投げ出したように不規則に床へ破片に混じって転がっている。

「お前はいつもそうだ！ 身分がどうこうって、関係ないだろうが！」

「関係ないわけないだろ馬鹿王。少しは頭冷やせ」
「誰が馬鹿だ！」

チエックの方が不利なのかナイトラが見下すように淡々とそう返す。するとチエックの怒りに触れたのかチエックは近くの棚の引き出しを勢いよく引くと中に整頓して収納されていた宝石の散りばめられている装飾品を取り出した。手に収まるサイズの鏡を掴み出すとそれをナイトラに向けて全力投球する。ナイトラがそれを回避すればチエックは引き出しの中から指輪を取り出して投げつけた。それにも宝石が埋め込まれていたりするのだろうかウォルの位置からはよく見えなかった。

「もう、やめてください！ 二人とも、お願いですから！」

そう懇願するシーナは涙を流していた。それでも部屋の中に入ることは出来ないようにドア付近で足が止まっていた。クジユは何も言わず険しい表情で喧嘩を続行する二人を眺めている。その険しさは体調の悪さからくるのか、それとも別の何かからくるのかはウォルには読み取ることは出来なかった。

「俺は！ 俺はなあ！」

次から次へと物を手当たり次第に投げつけるチェックはそのうちに涙声へと変質していき、それに呼応するようにナイトラは投げつけられた物を避けることを唐突にやめた。それは泣きだしそうになっているチェックに対して驚いているようでもあったし他にも意図があるように思えなくもなかった。

チェックが投げつけた物のひとつである鋏はナイトラの頬を掠め、傷を作って床へと転がった。鋏が目にあたれば失明しかねないのだがナイトラは避けようとはしていないし、チェックはその危険性を判断出来る程の冷静さは持っていないようだった。

「どうすりゃいいんだよ！ 教えてくれよ！ 俺は！」

投げる物が尽きたチェックは崩れる表情を隠すように両腕をクロスさせるとそれで顔を覆った。それでも隠すことが出来ない口は零れ出しそんな泣き声を無理矢理押しとどめようとしているせいで酷く歪み、絶え間なく震えていた。溜め込んで溜め込んで、噴出してしまいそんな感情をそれでも吐き出させまいと必死に堪えているような印象を受ける。その印象と実際はたいして違いがなかったのかチェックは唇を震わせたままゆっくりと口を開いた。

「俺はお前が好きただけなんだよ……」

衝撃的な告白だ。ウォルは驚きの余りに周りを見渡すが喧嘩を眺めるシーナもクジユもチェックの告白に驚いた様子はなかった。クジユは驚く気力もないのかもしれないがそれにしても無反応なのは気にかかった。

「クジユ、もしかして気付いてたんですか……？」

クジユは黙り込んだまま何も言わない。否定ならどという形にせ

よ反応を見せるはずだ。それならばこれは肯定という判断でいいの
だろう。横目でシーナを見れば彼女は床にへたり込んで涙を流し
続けていた。顔は手で覆われていて嗚咽しか聞こえないが泣いてい
ることは間違いなかった。彼女を慰めるべきか、喧嘩を仲裁すべき
か迷っていると喧嘩は方には変化が現れたようだった。

「どうしろって言うんだよ。離れればいいのかよ？ 離れて、どう
なるんだよ。離れて普通にやってけ

る自信はねえ。でも迷惑なんだろう、離れたいんだろ？ 言えよ。頼
むから、そう言ってくれよ！」

血を吐くようにチェックが叫ぶ。涙声になっているせいで叫びは
掠れてところどころよく聞き取ることが出来ない。それでも全体の
意味を理解するには充分だった。鼻を嚙りながら嗚咽を漏らすチェ
ックはもうなりふり構ってはいられないらしい。目を何度も服の袖
で強く擦って涙を無理矢理拭くと腫れぼった目で真っ直ぐにナイト
ラを睨みつけた。ナイトラはそれに動揺した様子も見せず着実にチ
エックに歩み寄る。

チェックの発言は矛盾だらけで、冷静さを欠いていることはすぐ
にわかる。だがナイトラは先程から一切喋らず表情を崩さないのも
何を考えているのか、冷静なのかそうでないのかは判断出来ない。
もしもナイトラまで冷静さを欠いているというのであれば割って入
って止めなければいけないだろう。そんな風に身構えながらナイ
トラの行動を見逃してしまわないように観察する。ナイトラは喚く
チェックの目の前まで歩み寄ると突然両手を大きく広げた。あまり
にいきなりの行動にチェックが肩を震わせて驚くがナイトラは意に
も介さない。

「もう黙れ」

ここでようやく不愉快そうにはあるが表情を歪めたナイトラはチェックの背中へ手を回すと優しい手つきでチェックを抱き締めた。あまりにスマートな動作に誰もが反応出来ずにいるとチェックは驚愕の余り泣き止んだ。空気に溶け込むような震えた声はもう聞こえなくなっていた。

「……」

何か言いたいのだろうが声のせいでクジュが何も言えないでいる。そこまではわかったのだが流石に何を言いたいかまではウォルにはわからない。それが歯痒い。そんなことを考えているのがクジュの方には伝わってしまったらしく気まずそうに目を逸らされてしまった。余計に歯痒い。

チェックを抱きこんだナイトラは目線をこちらにやると億劫そうに首を動かした。その表情はひどく面倒臭そうで、そのくせチェックにうつされたのか泣き出しそうに瞳が細められている。

「クジュ様、ウォル様、姉さん。申し訳ないのですが客間で待っていてください。チェックが落ち着いてから説明に向かいます」

ウォルとクジュに対してなのだろう。丁寧な言葉遣いをするナイトラはこれ以上三人に踏み込まれることを拒絶していた。しかしそんなことは知らないとはかりにクジュは部屋の中で踏み込もうとする。クジュの肩を掴んでそれを阻止すれば睨まれたが気にしない。

「ナイトラさんが出て行ってほしいって言ってるんですからその通りにしましょう。話は後でも出来るじゃないですか」

それでも止まろうとしないクジュの脇に手を差し込み、抱えるよ

うにして無理矢理引き摺っていく。まだ体調は万全ではないらしくさほど抵抗は受けなかった。それを幸いばかりにクジユを引き摺る。シーナに客間の場所を聞いて案内してもらう。シーナも戸惑っているようで先程までの泣き顔は引っ込んで困惑が前面に押し出されていた。

「すみません、客間はこちらになります」

「あの、シーナさん」

「はい、なんでしょう」

わずかながら抵抗を試みるクジユをなんとか押さえこんで運びながらシーナに目をやる。最初は困惑していたシーナはチェックとナイトラから離れれば離れるほど冷静さを取り戻してきているようだった。客間が近付いてくるとシーナは弱々しくウォルへ微笑んだ。

「心配してくださらなくても大丈夫ですよ。最初から私の立ち入る隙間なんてなかったんですから」

自虐ではないらしく諦めた様子のシーナはその一言でウォルの表情が悲痛に歪んでしまったことに気付いたのだろう。もう一度大丈夫ですからと繰り返してから客間のドアを開けた。金属が擦れ合う音を何気なく聞きながらまるで悲鳴みたいだなんて馬鹿げた感想を抱く。するとそれを見透かしたようにクジユが鼻で笑った。何がおかしいのかとクジユを見たがクジユはウォルから目を逸らしただけで何も語ろうとはしなかった。

世界を終わらせる方法

客間に通されてしばらくはシーナが落ち着きなく辺りを徘徊していたが次第にそれもなくなりシーナも客間のソファ―に腰をおろして二人を待っていた。彼女の心境を訊ねてみるのも手かもしれないが重苦しい空気の中でそれを問うのは憚られた。クジユはクジユで自分の声で相手に不快感を与えてしまうことが嫌なのか口を開こうとしない。こういった時ばかりはクジユの体質をありがたいと感じてしまう。クジユは無神経なところがあるためよく他人の触れてほしくないであろうところに土足で踏み入ろうとしてしまう。それを回避出来るのがウォルとクジユが忌み嫌っているクジユの声質のおかげというのはなんとという皮肉か。クジユにそれを言えば睨みつけられる気しかないものでこれまでそれを口にしたことはないしこれから口にするつもりもない。

すっかり体調が回復したらしく、時折少しばかり咳き込むだけのクジユが万が一にも余計なことを言わないように密かに見張りながら二人を待っていたらドアがゆっくりと開いた。金属が擦れ合う音をたてながら押し広げられたドアを掴んでいたのはナイトラだった。先程別れた時の歪んだ表情は見る影もなく凍てつくような無表情を貼りつけている。その背後にはチェックの姿もあった。

「よう。待たせて悪かったな」

明るく努めているのだろうがチェックの目の周りは泣き腫らした跡がくつきりと残っていた。まだ落ち着ききれていないのか声も若干涙声が混じっているような気もする。そう感じたのはウォルだけではないらしくクジユとシーナの眉間にも皺が寄った。

それでも王らしく毅然とした振る舞いでチェックがソファ―へ腰をかけたのを一瞥してからナイトラがドアを閉じる。それからナイ

トラはソファ―に腰かけることなくチェックの横へ立った。騎士としての定位置なのだろうか。その配置はとも日常に馴染んでいるように思えた。チェックがナイトラに腰かけるように提案するがナイトラは頑として首を縦に振ることはなかった。ナイトラの意味が揺らがないので諦めたチェックは小さく溜息を吐くところらへ向き直る。先程までの柔和な雰囲気は削ぎ落され、真剣な表情だけが剥き出しになっていた。そのギャップに動揺しているとシーナが立ち上がる。

「すみません、お茶でも淹れてきますね」

「シーナ、いい。座っててくれ」

シーナが中腰になった辺りでチェックが軽く手を挙げてそれを制す。シーナはそれでも立ち上がるうとしたがもう一度チェックが強く制せば諦めたのか腰をおろし直した。それを一瞥してからチェックは口を開く。話そうという意思が強いのか体勢は前のめりで話し始める。その距離の近さが嫌なのかクジュはわざとらしくソファ―へ深く腰かけたがチェックは気付いていないのかあえて気付かない振りをしているのかそのまま続けた。

「もうわかったとは思うが俺がお前等をここに招いたのは国民の記憶が弄ってもらうためじゃない」

招いたというよりは拉致といった方が相応しいのだろうかそんなツツコミを入れられる雰囲気でもないので黙っておく。幸いにもクジュもツツコミを入れる気はないようだった。そのことに密かに安堵しながらチェックの話の続きに耳を傾ける。

「俺はな、ナイトラが好きなんだよ。で、幸か不幸かナイトラも俺のこと好きなんだそうだ。信じられるか？」

「王、論点をずらすな」

騎士としてのチェックを敬う態度と素の態度が交ってアンバランスになってしまった言葉でナイトラがチェックを諷める。するとチェックは肩を竦めてから話を進めた。

「この国はとにかく批判することが好きなんだ。平和な分攻撃性の矛先が政府に向いてる感じだな。どんな小さなことでも失言があれば徹底的に批判される。そんなことの繰り返しで何度も王が変わった。俺は何人目だったかな」

「三百四十五人目ですが今はそれは関係ないので」

「わかってるって。脱線するつもりはねえから安心しろ」

ナイトラが諫めよりも早くチェックが先手を打つ。そのやり取りは会ってさほど時間が経過していないウォルにさえとても慣れているように見えた。しかしチェックの話が本当だとすればひとつ、矛盾が生じてしまう。

「あの、チェックさんはシーナさんと交際しているのではなかったんですか？」

身分違いだと言っていた。大臣達はチェックとシーナの関係を断ち切るために訴えていたようだったし、刺客まで送り込まれてきたそれが嘘だと言っのなら何かメリットがあつてのことだろうがそれにしてはリスクが大きすぎる気がする。第一、王の為とはいえ恋人のふりをするなどというハイリスクノーリターンな真似をシーナがする意味がない。裏で金を積まれた可能性もなくはないがここ数日シーナと一緒にいて彼女からそういったずる賢さが備わっているようには見えなかった。

あまり頭が良い方ではないので考えてわからなければ本人に聞く

しかない。そう考えての質問だったのだがチェックは困り果てたように眉をハの字に下げた。それをナイトラが一瞥して彼は彼でわずかに目を伏せる。その真意が読めずに首を傾げると隣のクジユが重い溜息を吐いた。世の中に存在する黒々とした感情を凝縮したような強い苛立ちを感じる溜息に驚いてクジユの方を見る。するとクジユは心底呆れたとも言いたげな表情でウォルを見て吐き捨てた。

「カモフラージュ」

まるで何を今更そんなことを言い出すんだとも言出しそうなクジユはそれだけ言うのと鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。本当は喋らないつもりだったのにウォルがあまりに鈍感だったので思わず口を挟んでしまったのだろう。そのことに申し訳なさを覚えつつもそれが真実であるか確認するために三人を見る。

チェックはどんな顔をしていいのか決めかねているらしくウォルと目が合った瞬間に爽やかな笑みを作った。だがそれも失敗してしまったらしく歪んで今にも泣き出しそうな表情になってしまっている。ナイトラもやはりどんな表情になるべきか決めかねているようだ。ただチェックと違って下手に取り繕うことはせずにわずかに不機嫌さを覗かせる無表情を貼りつけた。それからシーナ。身体を少し捻って彼女の方を見れば彼女は顔を伏せていた。太腿を強く掴む両腕は真っ直ぐに伸びている。余程の力が入っているのか太腿と一緒に掴まれているスカートは大量の皺を作り、彼女の両腕は小刻みに震えていた。手は血がうまく通っていないのか不健康そうに白く変色しているようだ。これだけ各々にあからさまな態度をとられれば鈍感なウォルにでも察することは出来た。

「……同性はな、犯罪なんだよ」

なんと言つべきかウォルが考えあぐねているとチェックがぼつり

と零す。その一言だけで全てを察することが出来るほど頭は良くないのでチェックの次の言葉を待つことにした。

「男同士とか女同士とかの恋愛はこの国では重罪で見つかり次第処刑。あ、勿論王とかでも例外なく。あれ何番目だっけか？男好きで処刑された王」

「二百二十三日目」

もう王として接することが面倒なのかそれだけを端的に答えるとナイトラは黙り込んでしまう。なんだよつねえなあ、なんて言いながらチェックは正面を向いた。いきなり目が合って驚く。

「だから俺はシーナと交際してることにした。シーナも俺と弟の命がかかっているからって協力してくれた。酷いだろ？それくらいの自覚はあるさ」

チャックが自嘲気味に笑う。うまく笑みを作ろうとして今回も歪んでしまったらしく激しい違和感を伴う。明るい表情ばかり作るのに取り繕うのは苦手らしい。表情を取り繕うという点においては無表情を貫き通すナイトラの方が優秀そうだ。

ええ、酷いですねとでもクジユならば返しただろうがウォルにはそんなことが言えるはずもなく、かと言って貴方は悪くないと言えるほど偽善的でもなかった。そのためやはりチェックの次の言葉を待っている和不意に隣のシーナが意を決したように立ち上がった。顔は相変わらず下を向いていた。

「わたし、私は王とナイトラの役に立てるのなと思って自ら提案したのでから王が酷いということは決して」

「うん、ありがとうな。でも今はお客さんと話してるんだ。座ってもらえるか？」

「でも」

「何度も言わせるな。座れ」

「……」

食い下がろうとしたシーナをチェックが指差す。重低音での命令口調に気圧されたシーナは大人しくソファーへ腰をおろし直した。それを見届けてからチェックは先程の苛立った命令口調から一転して言い聞かせるように声を和らげる。

「シーナ、いいか。いくら自分で望んだからって言っても俺達はお前を利用したんだ。それは酷いことだ。わかってくれるな？」

疑問形で締めくくったくせにその言葉には有無を言わせない雰囲気が含まれていてシーナは素直に答えることはせずに目を更に深く伏せただけだった。ナイトラがそれに対して何か言おうとしたがそれをチェックが制した。それからまたウォルを見る。

「記憶を消せるのはクジユの方だったよな？」

「そうですね」

ウォルの声も特殊なのは特殊なのだが単体ではなんの役にも立たない。そんなことを今言う必要もない気がするので黙ってチェックの質問にだけ答える。するとチェックは視線をウォルからクジユへと移した。クジユはといえば視線を向けられても興味がないとばかりにそっぽを向いたままだ。

「頼みがある」

クジユは答えない。

「俺は弱い王だ。今までナイトラに依存して、シーナを犠牲にして

なんとかここまでやってきた。でも俺は王だ。いつまでも甘えてるわけにはいかねえ。俺の弱さは俺が一番知ってる。だから頼みたいことがある」

クジユがチェックを一瞥した。その間にナイトラとも目が合ってしまったように一瞬ではあるか壮絶な睨み合いが展開される。火花が散ったように感じてしまうほど二人の互いに向けられる視線は攻撃的だった。何がそこまで二人を不仲にさせるのかはわからないが会った瞬間から反りが合わないという人間も中にはいるだろう。

「断ち切ろうと思う。だから記憶を消してほしい。最初に言えなくて悪かった。決心がつかなかったんだよ、女々しいだろ。でもいよいよ命まで狙われ始めたんだ。俺も自分を変えないと駄目だ」

クジユはやはり答えない。

ウォルとしては協力したいところだがこればかりはクジユが首を縦に振ってくれないことにはどうしようもない。まさかナイトラが気に入らないからチェックの依頼を蹴るなんて真似はしないだろうが依頼を蹴る可能性自体は多分にある。もしもそうなった場合は説得して協力してもらおう。そんなことをウォルが考えているとクジユが消え入りそうに小さい声で呟いた。

「手紙」

「は？」

意味がわからないとばかりにチェックは眉間に皺を作った。意味がわからないのはナイトラとシーナも同じようでシーナは首を傾げ、ナイトラは説明しろとばかりにクジユを睨みつけている。しかしクジユはこれ以上喋る気はないらしくナイトラを挑発するように鼻を鳴らした。クジユが説明する気は一切なさそうなので仕方なくウォ

ルが説明を開始する。説明をクジユに代わってするのはもう慣れたものだ。

「記憶を消すには手紙が必要なんです。えーと、そもそも誰のどんな記憶を消しますか？」

「俺とナイトラのお互いのことが好きだっていう気持ちだな」

それを聞いてなんとなく予想はしていたが悲しくなってしまう。環境のせいで自分のやりたいことが出来ないというのはとても辛いのだと思う。想像するしか出来ないが想像しただけでも相当の苦痛を伴う生き方だということはある。彼等はきつとその生活に疲れてしまったのだろう。それならば本人が望むようにしなければいけない。幸いにもクジユは乗り気になってくれているようだし。

「まず誤解があるようなので言っておきますね。クジユは記憶を消せるわけじゃないんです。クジユが消せるのは感情です」

何度もした説明は噛むことも言い淀むこともなくすらすらと口から滑り出る。

「まず消したい感情を思い浮かべながらその感情に沿う言葉で手紙を書いてください。好きという感情の場合は好きな相手に宛てて書くのが一番いいと思います」

こんな豪華な場所なのでペンと便箋がないということはないとは思ったが念の為の懐から二人分取り出してチェックへ差し出す。別にこのペンと便箋を絶対使わなければいけないわけではないことを告げればチェックはペンと便箋を返してきた。素直にそれは受け取って懐にしまい直す。

「クジュは手紙に書いてある感情を消すことができます。正確には消すわけじゃなくて塗り潰すんですけど結果は同じですから。さつきも言いましたけど手紙に書いてある感情を消してしまうので余計なことは書かないようにしてください。例えばナイトラさんのチェックさんに対する敬愛とか。そういったものまで消したくないなら手紙の内容では一切触れないでください」

淡々と説明していると蚊帳の外になってしまったシーナまでもが真剣に耳を傾けていた。そのことを少しばかり気恥ずかしく思う。

「手紙を書くだけでいいんだな？」

「ええ、後はクジュの仕事ですからお二人は手紙を書いてくださるだけでいいと思います、多分」

尻すぼみになってしまったのはウォルの判断だけで断言することは出来ないからだ。もしかするとまだ協力してもらうことになるのかもしれないしむしろその可能性の方が高いと思っている。しかしクジュは何も言わない。そもそも目を合わせてくれない。試しに名前を呼んでみてもこちらを一瞥するだけだった。そんな曖昧な説明でも一応納得はしてくれたらしくチェックは立ちあがった。

「じゃあ手紙書いてくるわ。ナイトラ、行くぞ！」

「大声で言わなくても聞こえる」

もうほぼ素で応答するナイトラは溜息を吐くと無駄に張りきって部屋を出て行くチェックからあまり離れてしまわないように早足で後を追う。その行動は王の護衛としてなのか、ナイトラ個人としての行動なのかはわからないが。

二人が出て行ったのを見送ってからクジュが大きく欠伸を漏らす。出来ればもう少し緊張感というものを持ってほしい。

「お前は消さなくてもいいのか？」

欠伸の名残がある中でクジユがそんな質問をぶつける。当然ウォルではなく、シーナへだ。いきなり呼ばれたシーナは両肩を震わせ、恐怖の張りついた瞳でクジユを見た。それもそうだろう。なんの前振りもなくクジユの声を聞いていつでも、例え表面上とは言え平然としていられるのはウォルくらいのものだ。

「何を、ですか？」

恐怖を宿しながらもシーナはそう問いを返す。それが本気なのかはぐらかそうとしているのかは定かではないが続きはウォルが引き受けることにした。クジユの聞きたいことはなんとなくわかる。

「シーナさんはチェックさんが好きですよ？ その思いは消さなくてもいいんですか？」

シーナが逃げる隙を与えないように言葉を選んでそう問えば彼女は口許を引き攣らせた。笑おうとして失敗したらしい。ここは作り笑いが下手な人が多いようだ。

「消すなっって言われてるんです」

クジユの顔色を窺いながらシーナがそう言っただと同時にクジユの眉間に深い皺が何本も刻まれた。それから勢いよく立ちあがってどこかへ行くこうとするのでその腕を掴んで引きとめる。非難するように睨まれたが気付かない振りをして腕を放すことはない。クジユは何度か腕を振ってウォルの手を振り払おうと試みたが徐々にその力が強くなっていくのがわかって諦めたようだ。溜息と共に乱暴にソ

ファーに座り直す。それを見届けてからクジュの腕を掴んでいた手を放す。それからシーナへと向き直った。

「それはチェックさんにですか？」

「ええ」

「それはどうして？」

チェックの意図が読めずに酷かもしれないがシーナに続きを促す。クジュは理解したからこそ憤っているのだろうが説明してくれる気はなさそうだ。それならばシーナに聞くしかない。

「私達がここにいられるのは私と王が交際しているからなんです」

確かに不自然さを覚えたことがないわけではなかった。これだけ広い土地なのにここに住んでいるのはチェック、ナイトラ、シーナの三人だけだと言う。王様なんていうものに今まで会ったことがないのでその程度が普通かはわからないのだが三人だけで暮らすというのは明らかに違和感があった。

「ナイトラだけならまだ王の騎士ですから近くにすることは出来ると思うんです。でもそれでも騎士は一人だけではないですから今ほどずっと一緒にいられるわけではないんです。ナイトラが専属の騎士になっっているのも私と王との交際があるという前提での贖身ですから」

声が震えてしまわないように。そんなことを考えているのかシーナの声はあからさまに強張っていて不自然さを醸し出していた。本人は気付かれたくないことだと思うので指摘することはせず、更に問う。

「チェックさんはシーナさんの気持ちは知ってたんですか？」

「はつきりと聞いたことはありませんでしたけど知っていると
思います」

「そうですか……」

それだけ聞けばチェックはとても酷い人間だと思う。先程本人も自嘲していたが彼はシーナの好意と立場を知った上でそれを利用した。更には弟であるナイトラもそれに目を瞑った。姉を少しでも裕福な環境に置きたかったのか、チェックと共に過ごす時間を手放したくなかったのか、それとももっと別の理由があるのか。何にせよ弁解の余地はないだろう。

「ひどい人達ですよね」

ウォルが絶句したのを見てシーナは大して感情の込められていない声で言う。同意を求めているわけでないらしくウォルの反応を見るよりも早く続けた。

「それでも私は二人が好きなんです。それぞれ意味は違いますが
どね。馬鹿でしょう？ 自分でもわかってるんですよ」

シーナは、どれほど辛かったのだろう。好きな人と弟が交際を始めて、それを隠すために表面的にはあるけれど好きな人と交際することになって。嬉しくないはずがない。悲しくないはずがない。いつそ嫌いになればそれだけ楽なのだろう。でも彼女はそれが出来なかった。もしかしたらしようとも思わなかったのかもしれない。そんな彼女を叱咤してやりたい反面癡い言葉をかけたくなる。どっちにするべきか。ウォルの判断が下されるよりも早くクジユが長々とした溜息を吐いた。

「これは慈善事業じゃない。金とお前のお人好しさに免じて依頼は受けてやるがな」

いつの間に料金交渉などしていたのだろうか。旅の費用はこうして依頼を受けることで作り出しているので依頼を無下にすることが出来なかったのだろう。だがクジユのことだ。不愉快だという理由だけで依頼を蹴った可能性だってある。それをしなかったのはシーナの想いを知っていたからだろう。

「クジユはどこまでわかってたんですか？」

クジユは答えない。あまり無駄なことは話したくないのだろう。それを話そうと話すまいと今後の展開には一切関係しない。

「ありがとうございます」

クジユの言葉をどう受け取ったのかシーナは深々と一礼する。それから誰かが黙り込んだ。特に話すこともないので沈黙が訪れるのは当然だろう。手紙が書き終わるまでさほど時間はかからないと思うのでこの沈黙に身を任せることにした。

さあ、塗り潰そう

チエックとナイトラの手紙は一時間ほど書き上がった。

チエックの手からクジユへと渡された手紙は綺麗に封がされていて中身を見ることは出来そうになかった。その手紙の中にどれだけの気持ちが込められているのだろうか。ウォルには想像することしか出来ない。

「これからクジユがお二人の感情を塗り潰してきます。クジユ、いけそうですか？」

二通の便箋を手にして考え込んでいるクジユにそう問えばクジユは首を横に振った。厳しいようだ。それならば協力してもらわなければいけないだろう。本当は危険も伴うので協力なしに済ませたかったのだが無理なのだが仕方がない。

マイペースに歩き出したクジユの後を追う。横に並んで懐から出したガムテープを手渡した。クジユはそれを受け取ると便箋とガムテープを左手に持ち、右手でガムテープの始まりを掴むと引つ張る。三十センチほどガムテープを伸ばしたところで乱暴に手で引き千切った。そして不要になった千切っていない方のガムテープをウォルに突き返した。それから三十センチのガムテープを更に半分に千切る。その動作を人通り眺めたところでウォルは少し離れたところをついてきている三人へと振り返った。その間にもクジユは歩き続けているので引き離されてしまわないように後ろ歩きをする。

「すみません。ナイトラさんに協力してもらいたいんですけど大丈夫ですか？」

「協力とは具体的にはどういった内容でしょうか」

二つ返事をしないあたりナイトラは慎重だ。説明をしようとしたところでクジュが足を止める。後ろ歩きをしていたせいで止まるのが遅れて壁にぶつかった。後頭部が痛む。

クジュは頭をさするウォルに一瞥されることもなく突き当たりの部屋のドアに便箋を一つ押しつけた。その上にガムテープを貼りつけて便箋をドアへ固定する。もう一つの便箋も同じようにドアへと貼りつけた。

「これからクジュはお二人の好きという感情と戦ってきます。感情は戦って倒さないと消せないんです。でもクジュはあまり強い方じゃないというか、むしろ弱い方なんですよ」

苦笑混じりに事実を告げればクジュに睨まれた。事実なのだから仕方ないだろう。痛い視線をなんとか受け流しながら続ける。

「だからナイトラさんにも行ってきて戦ってほしいんです。チェツクさんは王様ですから、流石に頼むわけにもいきませんし」

説明といつてもこれからクジュがやろうとしていることを言葉にするのは困難だ。それならば端的に説明して協力してもらうことにしよう。

「協力してもらえますか？」

してもらえなければクジュが無事に帰ってこられる可能性が大幅に下がるのだがそれはあえて言わないことにしよう。そういう脅しをかけるような言い方はあまり好きではない。出来るだけにこやかにそうナイトラに再度問ってみればナイトラは「わかりました」と躊躇することなく協力してくれる意思を表明した。

「それは良かった。じゃあこれをして行ってください」

ポケットを探って耳栓を取り出す。オレンジ色をしたそれはきちんと両耳につけられるように二つ用意してある。それをナイトラに渡す。ナイトラは意味がわからずに戸惑っているようだったので自分の手を耳に当ててここにはめるのだということを伝えておく。ナイトラが聞きたいのは耳栓をしなければいけない意味なのだろうがそれを説明しても理解されるのは難しいだろう。だから説明をすることはなく無言ではめることだけを指示すればナイトラは渋々ながら耳栓を両耳へ押し込んだ。そうしている間にチェックとシーナが驚きの声を上げた。

「なんだ、これ……」

「何をしたんですか……」

先程クジュが手紙を貼りつけたドアは目に痛いほどに光り輝いていた。その目の前に立つクジュはそのあまりの眩しさに目を細めているがドアから離れようとはしない。そしてこちらを一瞥すると耳栓をはめたナイトラを手招きした。ナイトラがクジュへ歩み寄るとチェックとシーナが不安そうに表情を曇らせたが何も言わない。ナイトラはチェックの頭を軽く叩いてからにやりと悪戯好きの子供のような笑みを作った。それからチェックが何か文句を言うよりも早くクジュがナイトラの手を取ってドアを開けた。

「うわっ！」

「きゃっ！」

「っ！」

あまりの眩しさにその場にいた全員が目を閉じる。痛いほどの静寂には光が差し込むばかりで聴覚への情報は一切ない。眩い光は瞼

を突き刺して、目を閉じていても尚視界を明るく彩っていた。しかしそれも次第におさまっていく。目を閉じた世界が暗く戻った時、ようやく目を開けることが出来た。

「いねえ……」

ぼつりとチェックが呟く。その言葉通り、クジュとナイトラは姿を消していた。そこには便箋がガムテープによって貼りつけられたドアがあるだけで、それもきちんと閉められていた。

「ウォル様は行かないんですか？」

シーナはつきりウォルも同行すると思っていたらしくウォルがこちらに残っていることに疑問を投げかけた。その率直な問いに苦笑しつつもウォルは答える。

「ええ。あつちに俺が行っても足手まといにしかりませんから」

自分で言うのも情けないが事実だ。それならば待機していた方がいいだろう。シーナにはウォルも特別な人間に映っていたようで申し訳ないのだがウォルは本当に大したことは出来ないのだ。

「無事に帰ってくるように祈りましょう」

「無事に帰ってこねえわけがないだろ。俺の自慢の騎士が行ってるんだぜ」

胸を張ってそう主張するチェックの瞳はシーナに負けず劣らず不安げに揺れていた。そう自分に言い聞かせていないと不安なのだろう。それならばその言葉に乗ればチェックも少しは不安を和らげて

くれるのだろうか。

「ええ、きっと帰ってきますね」

正直なところ、今回はかなり厳しいと思うのだがこちらで不安を煽っても仕方がないだろう。ウォルに出来るのは待つことだけだ。特にすべきこともないので壁によりかかって目を閉じる。眠ってしまわないように気を付けて二人の帰還を待つことによろ。

まるで童話のよう

「つと！」

ふらつく足取りでなんとか着地する。どこから落ちてきたのかとあたりを見渡せば天井にドアが貼りついていてた。ドアは開いたままぶらぶらとだんだん動きを小さくしながら揺らめいていた。これはここから帰るのは無理かもしれない。

「ここはどこですか」

クジユよりも先に地に足を着けていたらしいナイトラは訝しげにあたりを見回している。天井のドアについては深く考えないことにしたらしい。意外な順応性の高さだ。

「見たところ、官邸に見えるんですが」

ナイトラの指摘通り、そこは確かに官邸だった。だがそこにチェックやシーナ、ウォルはいない。全体に霞みがかかったように視界は何故か悪く、建物の一部は歪んでいたり崩れ落ちたりしている。クジユが壁を軽く叩くとそこがあっさりと崩れる。この異常な脆さではいつ崩れるかわかったものではない。

「ここは平たく言えば感情の世界だ」

「感情の世界？」

「あまり考えるな。これからこつちのお前と王を捜す。攻撃してくるから防御に徹しろ」

意味がわからず反復したナイトラにそれだけ告げるとさっさと歩

き出す。ナイトラは耳栓をしているので多少は大丈夫だろうがあまり声を聞かせ続けたくはない。だいたい、声が有害なのは他人だけではない。これまではクジユの声質を相殺するウォルがいたのでわりと平気だったが今は離れている。つまりダメージは蓄積されていくばかりだ。それならばさっさとやるべきことを終えて帰らなければいけない。ナイトラに一々説明している暇などなかった。

「一つだけ教えておいてやる。極力傷は負うな。ここでは傷を負ってもすぐに塞がる。だが、あっちに戻った途端その傷全部が戻ってくる」

「つまりこつちでは元気でも致命傷を負えばあっちに戻った途端死ぬってことですか」

「飲み込みが早くて助かる」

やはり耳栓をしてもクジユの声を聞き続けるのは辛いらしくナイトラの眉間に皺が寄る。体調不良を訴えられて使い物にならなくなると困るので早々に話を切り上げる。最も話さなければいけないことはきちんと伝えたので大丈夫だろう。

まずはこの建物のどこかにいるはずのこちらのチェックとナイトラを捜さなければいけない。とりあえず見晴らしの良さそうなところへ移動しようとしたところでクジユはびたりと足を止めた。ナイトラは一瞬それに不審げな表情を見せたがすぐに合点がいったようで小さく「ああ」と呟いた。

「……チェック？」

ナイトラが思わず呟く。ナイトラが振り返った先からは誰かの啜り泣く声が響いてきている。ナイトラが呟いたようにこの声の主はチェックだろう。チェックはチェックでもナイトラの知っているチェックではないが。

「耳栓は外すなよ」

「わかっています」

耳栓が外れてしまわないようにもう一度奥へ押し込んだナイトラを一瞥してから泣き声のする方へ歩き出す。呼吸をすることを考えていないのか、嗚咽を吐きだすことだけしか考えていなとしか思えない泣き声は時折息が続かないのか不自然に止まる。恥も外聞もないその泣き方はいい歳をした大人のものとは思えなかった。

進む先のドアはまるで進路を阻むかのように歪んでいて開くことが出来ない。ドアを壊して進もうと蹴り飛ばしてみるが脚力のある方ではないのでびくともしない。思わず舌打ちをすればついて来ていたナイトラがクジユを押し退け、ドアに渾身の蹴りを見舞った。するとドアはわずかながらに軋む。大して変化はないように見えたが試しにドアを押してみるとなんとか開くことが出来た。

「……」

なんとなく悔しいのは口にしないことにしよう。口に出しても大して意味もないことだし。ドアを開くとチェックの泣き声が更に大きく耳に届いた。チェックは近いようだ。

二人の相性

クジユとナイトラがあちらに行つてからチェックは落ち着きをなくしていた。落ち着かないのはもしかするとすれよりも前からだったかもしれないが今とてつもなく冷静さを欠いていることは間違いない。一か所に留まり続けていることが出来ないのかぐるぐると近くを徘徊するチェックは聞き取れないくらい小さな声でぶつぶつと何を呟き続けている。もしかするとナイトラを心配する内容かもしれないしもつと別のこともかもしれない。

「チェックさん、落ち着きましょう。俺達が焦つてもどうにもならないですよ?」

チェックの異常な焦りはだんだんとシーナにまで感染し、二人揃つて落ち着きを失くし始めたので声をかけてみる。流石に二人が焦っている中で一人だけ冷静を保てるほど強くはない。自分が落ち着くためには二人に冷静でいてもらう必要があつた。勝手なのかもしれないがわかつてほしい。

「いや、無理だろ。俺はそんなに図太くねえ」

「あの、ウォル様は本当に行かなくてよろしかったのですか?」

チェックが即答した時点でこの話はこれ以上広げることは出来なさそうだ。それを察したのかシーナが新たに問いを投げかけた。新たにというよりは再度確認するといった意味合いの方が強いが沈黙が続くよりはいいだろう。

「あつちには滅多につれて行つてもらえないんですよ。俺が行った方が負担は減るんですけどね」

「負担」

具体的にどういった負担なのかわからないシーナはただ反芻した。興味がこちらに移ったことで気が逸れたのかチェックは足を止めてこちらを見ている。そういえばまだ説明していなかったことに今更ながら気付いて説明を開始することにした。説明したところで理解してもらえない可能性も高いが。

「クジユの声がとても有害なのは御存じですよね？ あの声は聞いた人の耳から脳に侵入して内側からその人を侵していきます。症状は一概にこうとは言えないんですが気分が悪くなることが多いですね。重症だと意識が混濁したりもします」

そこまで説明したところでチェックとシーナの表情が曇った。そんな危険な声を持つクジユと共にあちらに行ったナイトラが心配なのだろう。正直、ウォルもそれは気にかかっている。

「俺の声はクジユとは真逆でクジユの声と相殺させることが出来るんですよ。例えばクジユが喋る。で、それを聞いた人が体調が悪くなる。でも俺の声をしばらく聞くと俺の声で浄化されて回復します。クジユの声は時間経過で効果が薄まることもあるにはあるんですけどかなりの時間が必要なので俺の声を聞くのが一番だと思います」

二人にわかりやすいように出来るだけ意識して澄んだ声を出す。透明なものを更に薄めて目視出来ないほどに純度の高い透明になっ
てしまっているその声はその割には存在は希薄になることはなくむしろ存在感を増しているように思う。

「ただ俺の声はクジユの声を全部浄化してしまうのであっちについ

て行くと確実に邪魔になってしまっんですよ」

二人の反応を知るよりも早くそう言っただけで説明を終える。あちらではクジユも騎士もかなり苦戦を強いられることになるのだらう。それがわかっていてもやはりこちら側からはどうすることも出来ない。それならばあまり余計なことを言わない方がいい。そう判断して再び黙り込めばシーナが無事を祈るように両手を合わせて目を閉じた。特にするべきこともないのでそれに倣ってウォルも両手を合わせて目を閉じる。これで二人の状況に変化があると信じられるほど楽天家ではないけれど何かが変わればいいなとは思った。

塗り潰し開始

どうやらここは玉座のある部屋だったらしい。地震でも起きたのかと思ってしまうほど部屋の物は元あった位置から離れ、思い思いに転がっている。部屋の内部は壁や床が不自然に欠落していたり意図的に破壊したような跡がいくつもあった。目を閉じてこの部屋を走ると間違いなくどこかの穴に足を引っ掛けて転ぶと思う。穴達に足を絡めとられてしまわないように注意しながらナイトラと足を進めて行くとチェックは玉座の上で両足を抱える形で丸まっていた。繊細かつ高級じみた装飾が施されている玉座と小さくなっているチェックとはひどくアンバランスな組み合わせだ。少しばかり前にはその玉座に凜とした態度で腰掛ける余裕に満ち溢れたチェックを見たはずなのだがあれは虚勢だったのではないかと思ってしまう。それくらいにその差は激しかった。こんな姿のチェックを見て動揺していなければいいのだが、という危惧のもとナイトラを一瞥する。するとクジュの危惧に反して彼は落ち着き払っていた。思えばナイトラは泣いていたチェックを落ち着かせていたし、このように弱体化しているチェックを目にするのは珍しいことではないのかもしれない。

チェックの泣き声ばかりが反響するこの空間はクジュにとっては耳障り以外の何物でもない。チェックがどれだけ血を吐くように泣いていてようと、それを見たナイトラにわずかながら躊躇の色が滲もうともクジュには関係のないことだった。

「ナイトラ、耳栓は外すな。あの男の言葉に耳を貸すな。俺を守れ」

一々その理由まで説明するのは面倒なのでそこは省いてそれだけ指示する。ナイトラは納得しきれてはいないようだったがチェックが頭を上げたところで理由を問いただしている場合でもない判断

したのか「わかりました」とだけ返した。

「……ナイトラ？」

先程別れたチェックと寸分違わぬ容姿と衣装で目の前のチェックはそう呟いた。あちらのチェックと違うのは泣き腫らした跡が強く残っているという点くらいだろう。ナイトラの前にはクジュもいたのだがチェックはクジュなど目に入らないとばかりに目に留まらせることはしなかった。それが不愉快でないわけではないが余計に喋ることも躊躇われるので黙る。

「……ナイトラ！ ナイトラだな！」

先程まで目を伏せてこの世の終わりとばかりに泣き続けていたチェックはナイトラの姿を目に留めた途端ぱあっという擬音が相応しいくらいに満面の笑みを作った。その表情を見てナイトラがあきらかに動揺したのがクジュからでも一目瞭然だった。いつそ得体の知れない怪物じみた敵ならば躊躇などないのだろうが敵がよく知った顔で、しかも想い人ということでは動揺するのは無理もないように思える。だがそれに同情する余地はない。これはチェックとクジュが望んだことに他ならないからだ。

一気に表情を明るくしたチェックは玉座の上で立ち上がると軽やかに玉座から飛び降りる。王たる威厳を見せるためのものなのか腰より少し長めであるマントがその動きにつられてはためいた。マントがチェックの動きに完全に追いつくよりも早くチェックはこちらへ駆け出してくる。人畜無害そうな表情でにこにこ微笑んでいるあたり敵意があるとは思えないのだがどう豹変するのは予想がつかない。警戒するにこしたことはないと思うのだがナイトラの戦意はこのチェックに大幅に削られていた。その証拠に守れと言ったのにチェックが走り寄ってきてもなんの防御体勢もとらない。面倒

な依頼なのは百も承知だった。が認識が甘かったかもしれない。

「ナイトラ！ 大好きだ！」

走り寄って来たチェックは床の穴に足を引っかけてたりしながらもなんとかこちらへ近寄り、ナイトラへと飛びついた。クジュは完全に無視されている。敵意を向けられるよりは楽でいいのだがどうにも釈然としない。

ナイトラはチェックに思い切り抱きつかれたにも関わらずわずかによるめき、後退しただけだった。どうやらチェックがこうして抱きついてくることを予想していたらしい。そのことに感心しつつも二人の様子を眺める。チェックはひたすらに愛の言葉を口にしながらナイトラに抱きつき続けている。ナイトラはといえば戸惑いを隠せないように酸素を求める金魚のように口をしきりにぱくぱくと開閉させていた。その両手はチェックへ回すことも出来ず、中途半端な位置をさ迷っている。このまま様子を見ているばかりでは事態は悪化しそうな気しかしない。現状を打破する方法をクジュは一つしか持ち合わせていないのだが、一つも持ち合わせていないよりはマシだと思う。

「騙されるな、惑わされるな。何度言わせるつもりだ」

何度も言った。苛立ち混じりにそうもう一度だけ言えばナイトラよりも早くチェックが反応を見せた。好き好きアピールは急に止みその顔から笑顔が消える。ナイトラからその様子が見えないのは残念だ。見えていたならきつとこのチェックが本物とは似ても似つかない、凍てつくような無表情を浮かべる偽物だとわかったことと思う。

「頭、痛え」

ぼつりと呟かれた苦痛を伴うその声は独り言か、ナイトラに向けられているのか。それが判断出来るよりも早くチェックはナイトラから離れるとクジユを睨みつけた。子供に睨まれたと錯覚してしまふほど幼稚で純粋な敵意に思わず苦笑してしまいそうになるがチェックの怒りを煽りそうだったのでやめておいた。やはり頭が痛むのかチェックは両手で頭を押さえながら唸った。

「なんでみんなして俺の邪魔するんだよ……」

チェックの言葉を見捨てる。まともに対応しても大したことがないのは明白だった。するとチェックは抗議を続ける。頭痛がするのにも構わず頭から手を離すと両手を広げながら訴えた。表情は苦悶に歪んでいる。

「俺はナイトラが好きなんだよ。どうしようもないくらい好きなんだ。好きでい続ける為なら何を犠牲にしたっていい。俺にはナイトラが必要なんだ。それなのにどうして邪魔するんだよ！」

利己的な言い分はきつとチェックの本音なのだろう。こういった人間の本性はどれだけ取り繕うともこちらではあっさり表面化してしまう。流石にこの言い分を聞き流すことは出来なかったのかナイトラが窘めるようにチェックの名を呼ぶ。するとチェックはぐりんともの凄い勢いでナイトラの方へと身体を回転させた。その瞳には涙が溜まり始めていてナイトラがまた動揺したのがわかった。

「何がいけねえの？ 俺はお前が好きなんだよ。この想いに誰も首を突っ込まないなら俺はどんな誹謗中傷だって受けてやる。国民の批判的になってもいい。それなのにどうして邪魔すんだよ！ なあ、ナイトラ！」

ナイトラは答えない。ナイトラがチェックに肩入れを始める前にさっさと仕事を開始するべきだろう。ナイトアが何か言うよりも早くクジュは口を開いた。

「お前の邪魔をしているのは他の誰でもないお前自身だ。お前がいると邪魔だ、大人しく消えろ」

どれだけ言い回しに気をつけてもそれが真実だ。チェック本人が『好き』はいらないと言った。消してほしいと言った。それならこの『好き』の塊であるチェックは消えるべきだ。

そうして宣戦布告の真似事をしてみるとチェックは瞳に溜めていた涙を溢れさせた。緩慢に目尻から頬へ伝うそれをチェックが拭うことはない。その代わりに身を翻して玉座の後ろへ身を隠した。

「おい、来るぞ。武器を構えろ。チェックと戦え、俺を守れ」

「……わかっています」

先程までチェックに翻弄されっぱなしだったくせに少し距離を置いただけでかなり冷静さを取り戻したらしい。あまり気乗りはしていないようだったが剣を鞘から引き抜いたナイトラはそれを構える。それとチェックが玉座の後ろから姿を現したのはほぼ同時だった。

「邪魔なのはお前だよ。お前が消えれば万事解決だよなあ？」

玉座の後ろに隠していたのか刀身が平均よりも長い剣を手にしたチェックは一気にクジュに向かって駆け出す。クジュは一步も動かない。代わりにナイトラがクジュの前へと立ち塞がるとチェックの一撃を剣で易々と防御してみせた。なんで邪魔するんだよ、とかナイトラへの非難が飛んだが取り合わない。

「あっちのお前のために俺を守ってる奴をあまり責めてやるな」

この際、喋る内容はなんでもいい。とにかく喋ってこの声をチェックに聞かせる必要があった。黒々とした粘着質なこの声は確実にチェックを蝕み始めている。やめろと叫び声がしたが無視した。チェックは無理矢理黙らせようとチェックを狙う。しかしその攻撃は全てナイトラによって防がれてしまう。チェックは苛立ちをあらわにする。

「お前！ 黙れよ！ 痛いんだよ！」

子どもじみた言い方で叫ぶチェックの身体を黒が這う。墨汁のような黒はチェックをそのまま包み込むかのように足元からチェックを覆い始めていた。チェックはそれを払い落そうと叩くが黒はそんなことはお構いなしに侵食を進める。黒は螺旋を描くようにチェックの足元から太腿辺りまでを覆う。

「痛いのが嫌なら大人しくしている。そうすれば最低限の痛みで済む」

「ふざけるな！」

もはや余裕に溢れたチェックの姿はどこにもない。この調子ならばチェックの『好き』を消すのにはさほど時間はかからないだろう。とにかくチェックに語りかけて侵食を進めながらそんなことを思う。しかしこんなに順調に物事が進むはずもなかった。

「……ナイトラ。……ナイトラ！」

急に攻撃を止めたチェックは天井を見上げると涙で満たされた瞳でナイトラを呼んだ。これはこの場にいるナイトラのことを呼んでいるのではないのだろう。警戒し、チェックを凝視しているナイト

ラの首根っこを掴んで後退する。

「なん……ですか!」

「来るぞ」

「は?」

耳栓をしているとはいえ、クジュの声を聞きすぎている。ナイトラは顔面蒼白で体調が悪いのは一目瞭然だった。しかし現段階では我慢してもらうしかないのです。そこに突っ込むことはしない。自分の声のせいで苦しんでいるかと思うと申し訳ないが仕方のないことだ。

「ナイトラナイトラナイトラナイトらナイとらナイとらないとら」

壊れたように何度も呼ぶチェックに狂気を感じて寒気を覚える。

あれほどまでに熱烈に名を呼ばれてナイトラはどんな気持ちなのだろうか。下世話な好奇心なので口にすることはしない。苦虫を噛み潰したような表情から察するに嬉しくはないのだろう。まあ、当然か。いくら好きな相手であってもあれは怖い。

いつまでチェックは呼び続けるのだろうか。ナイトラのためにもさっさと消して帰りたい。ナイトラだけではなくクジュ自身も声に多少なりともダメージは受けているのだが耐性がある分まだナイトラよりはマシなのではないだろうか。時折襲い来る軽い吐き気には気付いていないことにする。

不意に不穏な音がした。あえて形容するなら緊迫した空気に亀裂が入った時の音。間もなくしてそこまで離れた形容ではなかったことに気付いた。実際に天井には亀裂が入っていた。指の骨を鳴らす時の音を酷く大きくしたような音が断続的に響き、天井の亀裂は大きくなっていく。

「ないとら……」

そう呟いて恍惚とした笑みをチェックが浮かべたと同時に天井が崩壊した。天井だった瓦礫が落下してくる。それを避けるためにクジユとナイトラは入口あたりまで後退した。瓦礫が床へいくつも衝突したことで砂埃が舞い、一時的にはあるがチェックの姿は見えなくなってしまうていた。視界が悪い以上、砂埃が落ち着くのを待つしかない。もう少し遅れてくればいいものを、と舌打ちしたくなる気持ちを抑えながら近くに転がる高級そうな花瓶を手に取った。こんなものでも丸腰よりはマシだ。

「二手に分かれる。お前はお前の相手をしろ」
「は？」

ナイトラの顔には意味がわからないと書いてあるが無視する。説明している時間はないし、説明しなくてもどうせすぐにわかることだからだ。花瓶を構えて砂埃がおさまるのを待つ。何か武器になりそうな物くらい持つてくれば良かったと今更ながらに後悔した。砂埃はしばらく視界を邪魔していたが徐々に落ち着き、視界も回復してくる。霧がかかった程度の視界になったところでクジユは横にずれる。ナイトラは不審に感じていることを隠しもせずにクジユを見た。手を振って前を見ていろと指示する。意味がわからないながらもナイトラがそれに従ったところであちらに変化が起きた。

誰かが一歩踏み込んだ。砂埃が床にいくつも落ちていたのでそれを踏みつけ、砂利を擦るような音が大きく聞こえる。それを聞いてクジユは更にナイトラから距離を取った。すると突如霧のような砂埃を何かが突き抜けてきた。それが何か予測の出来ていたクジユは一瞥することもなく駆け出す。クジユの標的はチェックだ。どこにいるのかはよく見えないが声がするのでなんとなくの位置はわかる。

「なっ……！？」

焦って上擦った声をあげたナイトラを無視した。あちらはあちらでうまくやるだろう。それは投げやりでもあるし、信用しているからでもある。ナイトラを気にかけるのはやめて自分のやるべきことに集中することにした。まだわずかに舞い続けている砂埃に紛れてチェックに静かに、しかし素早く走り寄る。チェックがはつきりと目に入る位置まで接近したところでようやくチェックがこちらに気付いた。チェックが何かしらのアクションを取る前に花瓶を振り上げて頭上めがけて思い切り振り下ろす。チャックは驚愕に目を見開いたが防御することは叶わず、鈍い音を響かせて花瓶と衝突した。その衝撃に耐えきれずチェックは膝を折り、頭から崩れ落ちる。その胸倉を掴んでこちらに向かせた。

「はなせ」

純度の高そうな殺意の籠った目でチェックがクジユを睨みつける。だがクジユは動じない。これくらいで動じるわけにはいかない。

「断る。消えろ」

「いやだ」

先程の一撃が余程効いたのかチェックの抵抗はない。これ幸いとはばかりにチェックの耳元に口を寄せると囁き続けた。

「やめろ」

「お前は嫌気が差しているんだろう？ ナイトラを苦しめることしか出来ない自分に。愛しているのに何もしてやれない。返せるとすれば、地位くらいか？」

「いやだ」

拒絶を繰り返すチェックは力を振り絞って両手を振る。それはクジユの顔をわずかに引つ搔いただけだった。なめらかな線を描いた傷は十秒もしないうちに塞がる。傷を作ってしまったことに舌打ちしながら囁くことはやめない。

「だからお前は思った。それならリセットしてしまえばいい」
「ちがう」

「何がだ？ その証拠に俺がここにいる。お前がこうして形を持つてる。お前は俺に塗り潰されるために具現化された。現実から逃げるな」

じわじわとチェックを蝕んでいく黒は既に胸あたりまで侵食していた。胸を覆い始める黒は首と両腕へ分散しながらも確実にチェックを侵す。チェックの瞳には明確な恐怖が宿る。あともう少し。追い打ちをかけようと息を吸い込んだところで息が詰まった。中途半端に吸い込んだ息が逆流しておかしな声が出る。左脇腹に熱した金属を押しつけられたような痛みを覚えながら熱のこもった息を吐き出す。その場に今すぐにでも倒れ伏したい軟弱な精神を叱咤しながら機械人形じみた動きで首を回して背後を確認した。

「くそっ……」

左脇には見慣れた剣が突き刺さっていた。それはナイトラの剣に違いなく、しかしナイトラは剣を手に使っていた。それならばこの剣は何だろう。答えは簡単だ。この剣もナイトラの物だ。ナイトラは、背後に二人いた。

「どけよ。守るのは俺の役目なんだよ。役目だけじゃない。俺はチェックが好きだ！ 好きだから守ってる。何が悪い！」

完全にキャラが変わっていると言わざるを得ない。二人のうち一人のナイトラは丸腰で、ナイトラに攻撃されないように攻撃可能範囲外にまで後退している。どうやらナイトラはナイトラと戦いながら剣をクジユに投げ、見事命中させたいらしい。技術の為せる技か、愛の為せる技か、はたまたただの偶然か。

「だからどけよ！ お前は俺だろ！ 理解しろ！」

ナイトラは訴えるがナイトラは答えない。背中を向けているのでどんな表情をしているかはわからなかった。脳を侵しそうな激痛に何とか耐えて立ち続けているとナイトラが丸腰のナイトラに歩み寄った。

「早くしてください」

感情のこもらない声でそう言ったナイトラはナイトラに斬りかかるが避けられる。言われなくてもわかつている。そう言おうとしたがそんな元気もないので大人しくチェックに囁きかけた。

「きえたくない」

「……さようなら、だ。次に生まれた時は存在することを許してもらえればいいな」

「いやだ」

同じ台詞しか繰り返さないチェックの身体を這う黒はあつという間にチェックの残りの覗いていた身体を覆い尽くした。それを確認してからチェックを掴んでいた手を離す。ナイトラの叫び声がうるさい。床に崩れ落ちたチェックは一度少し跳ねるとまるで消し炭のように散り散りになって空気へ溶け込んでいった。その様子を眺めながら左脇に突き刺さった剣に手をかける。この空間では傷は自動

的に回復するが剣が突き刺さったままでは回復が出来ないようだった。わずかに引き抜くと激痛が走り、皮膚が粟立つ。

「……一人目完了」

熱っぽく吐いた息はきつと誰にも届かなかっただろう。改めてチェックを一瞥するとチェックはもう消え去っていた。

そうしてこちらも

やはり落ち着くことが出来ないのかチェックはあたりを歩き回っていた。シーナは未だに祈り続けているがウォルにはそれを続けることは出来そうにもなかった。どう時間を潰そうかと考えながらとりあえず立ち上がる。そろそろ時間かもしれない。目を閉じて祈り続けているシーナの邪魔になってしまわないように出来るだけ音を立てずに移動する。落ち着きなく徘徊するチェックを呼び止める。

「チェックさん」

「あ？」

嗜好に没頭していたのかウォルが声をかけた途端跳ね付けられたように顔をあげた。その顔色はあまり良くなさそうだ。

「大丈夫ですか？」

「何が？ 俺すげえ元気だぜ」

チェックの体調がすぐれないように見えるのは単に心配をしすぎるあまりのことなのかもしれない。これまで一体どれほどナイトラに依存していたのだろう。そしてそれを自らの手で手放そうとしているチェックはどんな想いなのだろう。聞きたくないわけではなかったが他人の心に土足で踏み込むような真似に思えてそれは躊躇われた。そうしている間にチェックが口許を押さえた。逆流する胃液を押しとどめようとしているようなその動作にウォルが目細める。チェックは嗚咽するように何度か咳を繰り返すと二、三步よたよたと歩いた。今にも意識を手放しそうなその危うさを傍観していることも出来ず手を貸す。チェックの異常に気付いたのはシーナはいつの間にか祈るのをやめてこちらを見ていた。そして腰を上げてチェ

ツクへと歩み寄る。ウォルの肩を掴んで支えにしながらチェックは咳き込む。

「な……だ、これ。げほっ」

「多分、あつちでチャックさんの『好き』が消されようとしてるんです。大丈夫ですよ。次に目を覚ました時には『好き』は消えていますから」

「……………ああ、そう」

たつぷりとした沈黙があつてから興味なさげにチェックがそう返す。そうしたところで限界点を越えたのか、安心したのか。目を閉じてその場に崩れ落ちようとしたチェックを咄嗟に抱きこむようにして支える。とりあえず支えられたことに安堵した。

「どうして王は泣かれていますか？」

心配そうに覗き込んできたシーナがそう問う。その言葉通りチェックは泣いていた。嗚咽もなく涙だけを静かに流しているその様子は不自然で作り物じみている。意識を手放した途端の涙にシーナが驚くのは無理もなかった。しかしウォルにとっては初めての経験でもないので特別慌てる必要はない。

「『好き』が消えて悲しいんですよ。チェックはもう覚えてないでしょうけど、急に心に空白が出来た心が泣いてるんです」

「……………もう『好き』を取り戻すことは出来ないんですか？」

「出来ないことはないですけど、クジユが許してくれないと思えますよ。苦勞して消してやったのにその言い草はなんだ、って」

「そう、ですね。すみません」

目を伏せたシーナに対してあまり気にしないように声をかけてか

らチェックをソファーまで運ぶ。チェックは意外に重さがあり、半ば引き摺るような形になってしまふ。それでもなんとかチェックをソファーに寝かせることが出来た。力一杯ソファーに投げつけると、いう乱暴な方法ではあったが。

「私、タオル持ってますね。汗をかいておられるようですし」

そう言われてチェックを見ればしっとりと汗をかいていてまるで風邪をひいているようだった。そのくせ呼吸は至って穏やかなのだから不自然さを覚えてしまふ。

「それがいいかもしれないですね」

その言葉を聞いてからシーナがタオルを取りに駆けていく。それを見送ってから汗ばんだチェックの髪を何度か梳く。

「まずは一人目」

チェックは無事だろうか。怪我をしていないといいと心から思う。残るはあと一人だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121w/>

ナイトキングの国

2011年11月4日08時10分発行